

和歌山市埋藏文化財発掘調査年報 7

— 平成10年度（1998年度）・11年度（1999年度）—



高井遺跡 第2次調査



史跡和歌山城 第19次調査

2002

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序 文

本書は、当財団が平成10年度（1998年度）及び11年度（1999年度）の2年間に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、主な遺構として、秋月遺跡では弥生時代の石器製作に関する掘り穴や古墳時代の建物跡、山口遺跡では古墳時代の水田跡や室町時代の建物跡、神前遺跡では弥生時代の水田跡、和歌山城では二の丸の月見櫓や駿河櫓などの基礎構造、また二の丸と西の丸の間の堀に架けられていたとされる「御橋廊下」に関する礎石などを検出し、遺跡の様相を明らかにすることができました。

以上、当財団の調査による新たな学術調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成14年（2002年）3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

理事長 喜 多 誠 一

例 言

1. 本書は、平成10年度（1998年度）・11年度（1999年度）に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載するものである。
2. 本書に掲載の調査については、既に報告書を刊行したものもある。未完のものについては報告書が刊行された際には、その報告をもって正式報告とする。
3. 本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は北野隆亮が行った。
4. 埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成は、以下の事務局組織で行った。

【事務局組織（埋蔵文化財関係）】

埋蔵文化財発掘調査

【平成10年度（1998年度）】

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎
文化振興課長 久保隆司
文化財班長 小松埴甫
学芸員 前田敬彦
学芸員 益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長 北氏 武
事務局長 松田優輝（～平成11年1月）
総務課長 川寄健治
事務員（埋蔵文化財事務担当） 奥野勝啓
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当） 北野隆亮
学芸員（ ” ） 井馬好英
学芸員（ ” ） 奥村 薫
学芸員（ ” ） 高橋方紀
学芸員（ ” ） 吉田綾子（～平成10年11月）
学芸員（ ” ） 藤藪勝則（平成10年8月～）
学芸員（ ” ） 川口修実（平成11年1月～）

【平成11年度（1999年度）】

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎
文化振興課長 久保隆司
文化財班長 小原保誠
学芸員 益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長 伊藤 明
事務局長 藤田光彦
総務課長 川寄健治
事務員（埋蔵文化財事務担当） 奥野勝啓（～平成11年7月）
主 事（ ” ） 西山佳宏（平成11年8月～）
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当） 北野隆亮
学芸員（ ” ） 井馬好英
学芸員（ ” ） 奥村 薫
学芸員（ ” ） 高橋方紀
学芸員（ ” ） 藤藪勝則
学芸員（ ” ） 川口修実

年報作成

【平成 13 年度（2001 年度）】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	喜多誠一
総務室長	高野眞次郎
総務室班長	久保雅英
主 事（埋蔵文化財事務担当）	山口美二
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	北野隆亮
学芸員（ " ）	井馬好英
学芸員（ " ）	奥村 薫
学芸員（ " ）	高橋方紀
学芸員（ " ）	藤藪勝則
学芸員（ " ）	川口修実

本文目次

I. はじめに

- 1. 平成10年度（1998年度）の調査…………… 1
- 2. 平成11年度（1999年度）の調査…………… 2

II. 埋蔵文化財の発掘調査概要

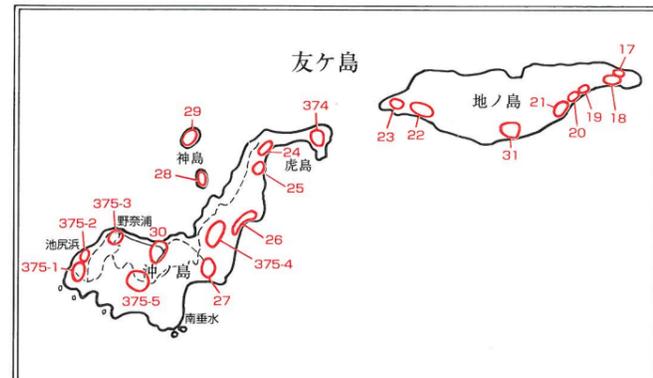
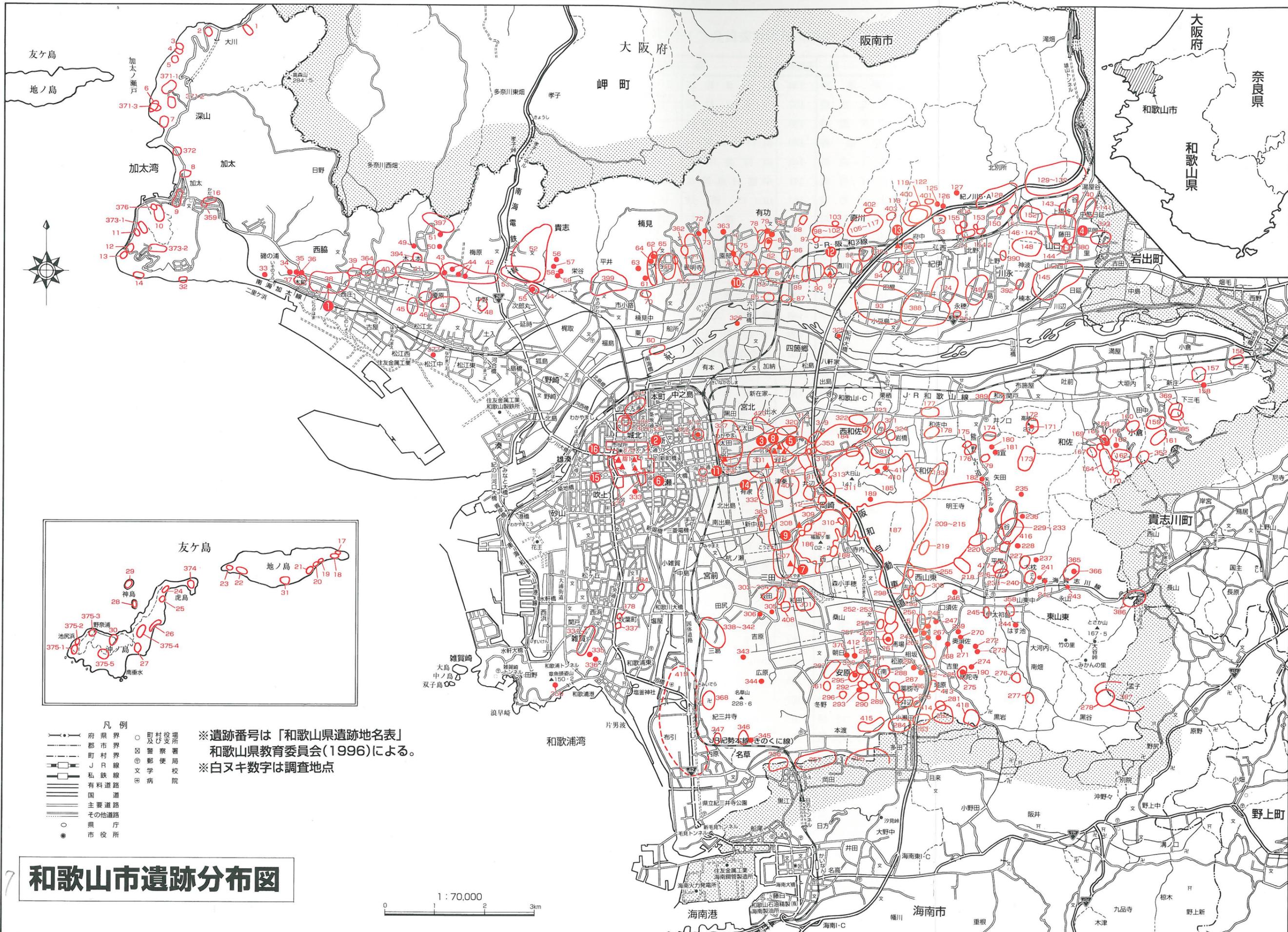
【平成10年度（1998年度）】

- 1. 西庄遺跡発掘調査…………… 4
- 2. 史跡和歌山城第19次調査…………… 6
- 3. 鳴神V遺跡第7次調査……………10
- 4. 山口遺跡第6次調査……………14
- 5. 鳴神V遺跡第8次調査……………18
- 6. 史跡和歌山城第20次調査……………20
- 7. 神前遺跡第3次調査……………24
- 8. 鳴神V遺跡第6次調査……………28
- 9. 井辺遺跡第4次調査……………30
- 10. 有功遺跡第2次調査……………31
- 11. 太田・黒田遺跡第44次調査……………32

【平成11年度（1999年度）】

- 12. 高井遺跡第2次調査……………34
- 13. 府中遺跡発掘調査……………38
- 14. 秋月遺跡第8次調査……………40
- 15. 史跡和歌山城第22次調査……………44
- 16. 史跡和歌山城第21次調査……………48

III. 普及啓発活動……………50



- 凡例
- 府界
 - 市界
 - 町界
 - 村界
 - 日線
 - 私鉄線
 - 有料道路
 - 国道
 - 主要道路
 - その他道路
 - 庁
 - 市役所
 - 町役所
 - 村役所
 - 支所
 - 警察署
 - 郵便局
 - 文庫
 - 学校
 - 病院

※遺跡番号は「和歌山県遺跡地名表」
和歌山県教育委員会(1996)による。
※白又キ数字は調査地点

和歌山市遺跡分布図



この地図の作成にあたっては、国土院の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を使用したものである。(承認番号 平13近使 第84号)
開版年次: 2002.3

和歌山市遺跡地名表 (「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会<1996年>より作成。)

遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称
1	報恩講寺遺跡	46	木ノ本中学校II遺跡	93	田屋遺跡	136	山口8号墳	179	和佐寺跡	252	千石山5号墳	296	大池遺跡	341	三田3号墳	382	本願寺跡
2	大川西方遺跡	47	榎原遺跡	94	府中II遺跡	137	山口9号墳	180	禰宜1号墳	253	千石山古墳群	297	赤津古墳群	342	三田4号墳	383	神前II遺跡
3	藻江遺跡	48	中野遺跡	95	府中III遺跡	138	山口10号墳	181	禰宜2号墳	254	菖蒲谷遺跡	298	吉礼貝塚	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡
4	しょうぶ谷遺跡	49	城山古墳	96	府中遺跡	139	山口11号墳	182	和坂古墳	255	吉礼III遺跡	299	西吉礼遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群
5	水谷遺跡	50	権現山1号墳	97	北山I遺跡	140	山口麿寺跡	183	和佐古墳群	256	千石山遺跡	300	東吉礼遺跡	345	内原古墳	386	大池遺跡
6	男良の谷遺跡	51	権現山2号墳	98	北山1号墳	141	中筋日延遺跡	184	花山古墳群	257	井戸1号墳	301	和田遺跡	346	内原遺跡	387	大旗山城跡
7	深山遺跡	52	高芝遺跡	99	北山2号墳	142	山口遺跡	185	岩橋千塚古墳群	258	井戸2号墳	302	和田岩坪遺跡	347	名草貝塚	388	西田井遺跡
8	大谷川遺跡	53	高芝古墳群	100	北山3号墳	143	谷遺跡	186	井辺前山古墳群	259	井戸3号墳	303~304	和田古墳群	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡
9	加太遺跡	54	栄谷貝塚	101	北山4号墳	144	里遺跡	187	寺内古墳群	260	馬場古墳	305	龜山神社古墳	352	金谷麿寺跡	390	神波遺跡
10	加太南遺跡	55	貴志古墳	102	北山5号墳	145	川辺遺跡	188	森小手穂遺跡	261	馬場遺跡	306	坂田地蔵山古墳	353	興徳寺跡	391	永穂遺跡
11	平の谷遺跡	56	川原崎遺跡	103	北山II遺跡	146	藤田古墳	189	寺内ナイフ形石器出土地	262	東池1号墳	307	神前遺跡	356	大田城跡	392	楠本遺跡
12	田倉崎I遺跡	57	川原崎1号墳	104	北山6号墳	147	碓古墳	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	263	東池2号墳	308	井辺遺跡	357	山崎山古墳群	393	吉田遺跡
13	田倉崎II遺跡	58	川原崎2号墳	105	直川八幡山1号墳	148	藤田遺跡	209~215	山東古墳群	264	東池3号墳	309	岡崎縄文遺跡	358	山東中遺跡	394	城山遺跡
14	船出遺跡	59	川原崎3号墳	106	直川八幡山2号墳	149	宇田森遺跡	218	若林古墳群	265	東池4号墳	310	森小手穂埴輪窯跡	359	加太II遺跡	395	岡村遺跡
16	加太駅北方遺跡	60	国有本遺跡	107	直川八幡山3号墳	150	上野庵寺跡(紀伊薬師寺跡)	219	吉礼砂羅谷窯跡	266	吉里銅鐸出土地	311	大日山I遺跡	360	雨が谷遺跡	396	室山古墳群
17	藻崎北浜遺跡	61	大谷古墳	1108	直川八幡山4号墳	151	上野遺跡	220	平尾1号墳	267	小山古墳	312	井辺I遺跡	361	冬野遺跡	397	木ノ本IV遺跡
18	藻崎南浜遺跡	62	晒山古墳群	108-2	直川八幡山14号墳	152	上黒谷遺跡	221	平尾2号墳	268	奥須佐窯跡	313	井辺II遺跡	362	鳴滝遺跡	398	府中IV遺跡
19	藻崎西方遺跡	63	慶円寺裏山古墳	109	直川八幡山5号墳	153	北野窯跡	222	平尾3号墳	269	円満寺古墳	314	鳴神II遺跡	363	園部円山古墳	399	平井遺跡
20	神前東浜遺跡	64	晒山11号古墳	110	直川八幡山6号墳	154	北野遺跡	226	楠古墳群	270	峯古墳	315	鳴神III遺跡	364	西庄II遺跡	400	深谷池北遺跡
21	神崎西浜遺跡	65	晒山12号古墳	111	直川八幡山7号墳	154-2	北野II遺跡	227	足守神社古墳群	271	西光寺窯地	316	鳴神IV遺跡	365	永山遺跡	401	名草池北遺跡
22	屋敷浜遺跡	66	雨が谷古墳群	112	直川八幡山8号墳	155	若宮池遺跡	228	赤山古墳	272	吉里1号窯跡	317	鳴神貝塚	366	永山古墳	402	湯谷池西遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	70	楠見遺跡	113	直川八幡山9号墳	156	上三毛遺跡	229	塩谷1号墳	273	吉里2号窯跡	318	鳴神V遺跡	367	井辺III遺跡	403	平野池南遺跡
24	一色谷遺跡	71	鳴滝古墳群	114	直川八幡山10号墳	157	下三毛遺跡	230	塩谷2号墳	274	頭陀寺古墳	319	音浦遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
25	柏の浜遺跡	72	奥出古墳	115	直川八幡山11号墳	158	小山古墳	231	塩谷3号墳	275	頭陀寺遺跡	320	鳴神VI遺跡	369	奥山田遺跡	405	山吹丁遺跡
26	深蛇池遺跡	73	有功経塚	116	直川八幡山12号墳	159	寺山古墳群	232	塩谷4号墳	276	大將軍窯跡	321	岩橋遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友田町遺跡
27	垂水遺跡	74	菌部I遺跡	117	直川八幡山13号墳	160	東国山古墳群	233	塩谷5号墳	277	有ノ木窯跡	322	栗栖I遺跡	371	深山要塞跡	407	津湊II遺跡
28	神島遺跡	75	菌部古墳	118	八王寺山古墳群	161	宮山古墳群	234	新出古墳	278	宝光寺跡	323	栗栖II遺跡	371-1	深山第I砲台跡	408	和田II遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	76	菌部II遺跡	119	橘谷I遺跡	162	小倉古墳群	235	明王寺経塚	279	松原1号墳	324	高橋神社遺跡	371-2	深山第2砲台跡	409	岩橋III遺跡
30	野奈浦遺跡	77	有功遺跡	120	橘谷II遺跡	163	小倉9号墳	236	矢田古墳	280	松原2号墳	325	紀ノ川銅鐸出土地	371-3	男良砲台跡	410	前山B226号墳
31	ハイブの浦遺跡	78	池田遺跡	121	橘谷III遺跡	164	明楽古墳群	237	北池古墳	281	滝ヶ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
32	浜遺跡	79	有功古墳	122	橘谷銅鐸出土地	165	小倉神社1号墳	238	殿山1号墳	282	滝ヶ峯遺跡	327	太田・黒田遺跡	373	田倉崎砲台跡	412	城ノ前1号墳
33	磯ノ浦1号墳	80	大同寺墳墓	123	弘西遺跡	166	小倉神社2号墳	239	殿山2号墳	283	薬勝寺南山古墳群	328	吉田窯跡	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
34	磯ノ浦2号墳	81	大同寺古墳	124	北田井遺跡	167	モント古墳群	240	殿山3号墳	284	仁井辺遺跡	329	鷺ノ森遺跡	375	友ヶ島要塞跡	414	薬勝寺II遺跡
35	磯ノ浦3号墳	82	大同寺遺跡	125	別所1号墳	168	小倉神社境内遺跡	241	土井山古墳	285	薬勝寺跡	330	鷺ノ森窯跡	375-1	友ヶ島第1砲台跡	415	本渡遺跡
36	磯ノ浦4号墳	83	法然寺遺跡	126	別所2号墳	169	金谷遺跡	242	丸山古墳	286	薬勝寺遺跡	331	秋月遺跡	375-2	友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
37	磯脇遺跡	84	六十谷遺跡	127	別所3号墳	170	奥池遺跡	243	高岡古墳	287	松原I遺跡	332	津湊遺跡	375-3	友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
38	西庄遺跡	85	和田遺跡	128	上野古墳群	171	高積山遺跡	244	桜山古墳	288	松原II遺跡	333	岡の里遺跡	375-4	友ヶ島第4砲台跡	418	滝ヶ峯II遺跡
39	平ノ下遺跡	86	西辻遺跡	129	山口1号墳	172	薬徳寺跡	245	伊太祈曾神社古墳群	289	薬師谷遺跡	334	関戸遺跡	375-5	友ヶ島第5砲台跡	419	紀三井寺塩田跡
40	木ノ本I遺跡	87	川口遺跡	130	山口2号墳	173	城ヶ峯城跡	246	チシヨ古墳	290	江南遺跡	335	関戸古墳	376	行者堂東遺跡	420	太田城水攻め堤跡
41	木ノ本II遺跡	88	六十谷古墳群	131	山口3号墳	174	禰宜I遺跡	247	城ヶ森1号墳	291	曾垣田遺跡	336	天神山古墳	377	松江経塚	421	木広町遺跡
42	木ノ本III遺跡	89	直川遺跡	132	山口4号墳	175	禰宜II遺跡	248	城ヶ森2号墳	292	曾垣田II遺跡	337	秋葉山貝塚	378	狛口石岩陰遺跡	指1	史跡和歌山城
43	木ノ本経塚	90	直川庵寺跡(明光寺跡)	133	山口5号墳	176	禰宜貝塚	249	城ヶ森3号墳	293	曾垣田古墳	338	アンドの鼻古墳	379	和歌山城跡		
44	釜山古墳群	91	高井遺跡	134	山口6号墳	177	河南中学校北方遺跡	250	城ヶ森遺跡	294	城ノ前II遺跡	339	三田1号墳	380	山口御殿跡		
45	木本小学校I遺跡	92	鳥井遺跡	135	山口7号墳	178	和佐中遺跡	251	相坂古墳	295	城ノ前I遺跡	340	三田2号墳	381	岩橋II遺跡		

I. はじめに

1. 平成10年度（1998年度）の調査

和歌山市における平成10年度（1998年度）の本財団の発掘調査受託事業は7件である。

調査に至った原因としては、店舗建築などの民間受託が2件に対して市道建設などの公共的な調査が5件を数え、比率的には公共的な調査が主体を占める。昨年度までの民間開発優勢の調査原因に対して逆転した形となった。公共的な調査では和歌山城の石垣改修などの史跡整備に伴う調査が2件行われたことが目に付く。また、和歌山市教育委員会が直接調査を行った事業では、民間の店舗建設に伴うものなどが4件であり、公共的なものはみられなかった。このことは、財団の調査とは逆の傾向であるといえる。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

弥生時代

弥生時代のものは、太田・黒田遺跡の南西端部にあたる第44次調査で中期の溝などを検出し、遺跡の南西端部にも遺構の存在することが確認された。また、和歌山平野南部に位置する神前遺跡第3次調査では弥生時代前期～中期初頭の水田遺構を検出した。神前遺跡は第1次調査で弥生時代前期の土坑1基、後期の溝1条を検出し、周囲に弥生時代集落の立地することが推定されていた。今回、水田遺構を検出したことは、その集落に対しての農業生産域を検出したといえ、神前遺跡の実体解明に貴重な資料を提供したといえる。

【1998年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
1	西庄遺跡	土砂採取	4月	45㎡	古墳時代の土坑と柱穴を検出し、製塩土器と滑石製子持勾玉などが出土。	井馬高橋	
2	史跡和歌山城第19次	史跡整備	7月～12月	1000㎡	二の丸北側櫓台（月見櫓・物見櫓・駿河櫓）の基礎構造及び石垣構造を確認。	北野奥村	
3	鳴神V遺跡第7次	店舗建築	7月	100㎡	古墳時代の遺構面で溝・土坑・ピットを、鎌倉時代の遺構面で溝・土坑を検出。	高橋	
4	山口遺跡第6次	小学校敷地拡張	7月～9月	214㎡	古墳時代の水田、室町時代の掘立柱建物などを検出。	井馬	
5	鳴神V遺跡第8次	市道建設	9月～10月	60㎡	江戸時代の溝、土坑を検出。	高橋藤敷	
6	史跡和歌山城第20次	石垣改修	11月～1月	110㎡	裏坂登り口に位置する結晶片岩石垣の構造を確認。	高橋	
7	神前遺跡第3次	遺跡実態確認	1月～2月	70㎡	水田、竹林、宅地の3ヶ所を調査し、弥生時代前期の水田、鎌倉時代の井戸などを検出。	井馬川口	
8	鳴神V遺跡第6次	店舗建設	7月	7㎡	古墳時代の土坑・柱穴、鎌倉時代の溝などを検出。	前田	市教委調査
9	井辺遺跡第4次	宅地造成	7月	25㎡	古墳時代の土坑を検出。	〃	〃
10	有功遺跡第2次	共同住宅建設	8月～9月	40㎡	時期不明のピット列を検出。	益田	〃
11	太田・黒田遺跡第44次	集合住宅建設	11月	43㎡	弥生時代の溝などを検出。	前田	〃

古墳時代

古墳時代についても多くの遺構・遺物を検出した。西庄遺跡で後期の土坑と柱穴群を検出し、多量の製塩土器と共に滑石製子持勾玉が出土した。鳴神Ⅴ遺跡では遺跡の南西端部で行った第7次調査で中期の遺構面を確認し、溝・土坑・ピットなどを検出した。井辺遺跡でも古墳時代初頭の土坑などが検出されている。

鎌倉～室町時代

鎌倉時代のもものは鳴神Ⅴ遺跡第7次調査で遺構面を確認し、溝・土坑などを検出した。また、神前遺跡の第3次調査では井戸などを検出している。

室町時代では、紀ノ川右岸に立地する山口遺跡第6次調査で掘立柱建物などを検出した。また、この調査について、注目すべき遺物として、高台内底面に「定口為公用」と朱書きされた中国製青磁盤が出土している。

江戸時代

江戸時代については、史跡和歌山城二の丸北側の櫓台上を調査した第19次調査で月見櫓・物見櫓・駿河櫓などの基礎構造の一部を確認することができた。月見櫓については、焼土層の検出や部分的な調査ではあるが下層断割調査の所見から、焼土層に示される火災を前後した時期にそれぞれ規模の異なる建物が建てられていたことを明らかにすることができた。また、駿河櫓の東側入口部分にあたるところで瓦製の塼を用いた、いわゆる「四半敷き」の床面を検出した。その他、櫓台に関する砂岩を用いた石垣について、裏込石材の種類や構築角度などの構造の一部を確認することができた。また、裏坂登り口に位置する結晶片岩を用いた石垣を調査した第20次調査においても、石垣の裏込石材の状況や構築角度など構造の一部などを確認した。

2. 平成11年度（1999年度）の調査

和歌山市における平成11年度（1999年度）の本財団の発掘調査受託事業は4件である。

調査に至った原因としては、店舗建築などの民間受託がみられず、小学校プール建設などの公共的な調査が4件であり、比率的には公共的な調査が全てを占める。昨年度に引き続いて民間開発の調査原因が減少し、影を潜める形となった。公共的な調査では和歌山城の石垣改修などの史跡整備に伴う調査が2件行われたことが目に付く。また、和歌山市教育委員会が直接調査を行った事業では、公共的な歩道拡張工事に伴うものが1件であり、民間開発の調査原因は財団同様みられなかった。このことは、民間開発の調査原因が激減したことを示すものであるといえる。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

弥生時代

弥生時代のものとしては、秋月遺跡の第8次調査で前期の自然流路と石器製作に関わるとみられる土坑を検出した。特に、検出した自然流路は秋月遺跡の東縁部を北東から南西に流れる規模の大きなもので、当時の古環境を復原するための貴重な資料提供であるといえる。また、石器製作に関する土坑の検出についても、秋月遺跡における弥生時代の集落に関する遺構の初確認であろう。

古墳時代

古墳時代について、高井遺跡第2次調査で前期及び中期の竪穴住居をそれぞれ1棟、後期のピッ

トなどを検出した。このことによって、それまで実態の不明であった本遺跡は古墳時代を通じて継続して営まれた集落遺跡であることを明らかにすることができた。

平安～鎌倉時代

平安時代のものは、高井遺跡第2次調査で検出した掘立柱建物群がある。この調査では掘立柱建物を8棟以上検出することができ、当地に平安時代の集落が展開することを明らかにした。また、中国製白磁、緑釉・灰釉陶器、瓦、圈脚円面硯などの出土や遺跡周辺に南海道のルートが復原されていることなどから、当遺跡で検出した平安時代の集落は近隣に存在する紀伊国府や直川廃寺跡などと関係の深かった可能性を指摘した。また、秋月遺跡でも土坑などを検出している。

鎌倉時代は、高井遺跡第2次調査で掘立柱建物と土葬墓などを検出した。土葬墓は北宋銭が15枚以上出土し、周辺に集石遺構が2基みられることなどから高井遺跡の鎌倉時代集落は丘陵裾の集落縁辺部に墓域を形成していたものと考えられた。

江戸時代

江戸時代については、史跡和歌山城第22次調査で二の丸と西の丸間に架けられた「御橋廊下」の橋脚基礎部分の礎石などを検出した。特に「御橋廊下」はいくつかの絵図に描かれており、今回の調査での具体的な遺構の検出はそれらの絵図史料との比較検討を可能にすることができたといえる。また、周囲の石垣裏込石材の状況や構築角度など石垣構造の一部なども確認した。

【1999年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積	調査概要	担当者名	備考
12	高井遺跡第2次	小学校プール建設	8月～10月	600㎡	古墳時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物・土葬墓を検出。	北野 井馬 川口	
13	府中遺跡	遺跡実態確認	11月～12月	260㎡	時期不明の石敷状集石遺構を検出。	北野 高橋 藤藪	
14	秋月遺跡第8次	屋内運動場建設	11月～2月	900㎡	弥生時代前期の自然流路、石器製作土坑、古墳時代の溝・土坑・竪穴住居、鎌倉時代の土坑などを検出。	井馬 藤藪 川口	
15	史跡和歌山城第22次	堀浚渫	12月～3月	500㎡	絵図に描かれた「御橋廊下」の橋脚遺構を確認。	高橋	
16	史跡和歌山城第21次	歩道拡張	9月～10月	20㎡	内堀に関する石垣を検出。	益田	市教委調査

Ⅱ. 埋蔵文化財の発掘調査概要

[平成 10 年度 (1998 年度)]

1. ^{にししょう}西庄遺跡 発掘調査

調査地 和歌山市西庄 559-23 番地

調査面積 45 m²

位置と環境

西庄遺跡は、広義の和歌浦湾に面しており、海岸砂州の内側に位置する。遺跡の範囲は東西 900 m、南北約 400 m に広がっており、古墳時代を中心とした海浜集落として知られている。これまで県道拡幅に伴う調査によって多くの製塩炉や住居址が確認されており、西庄遺跡が漁村としての性格を保ちながら大規模に土器製塩を行っていた遺跡であることが判明してきている。今回の調査地は遺跡のほぼ中央部に位置する。

調査内容

調査対象地において東西 5 m、南北 9 m の約 45 m² の調査区を設定した。調査地の現状は畑地であり、地表面の標高は 5.2 ~ 5.3 m を測る。基本的な土層堆積状況としては、まず現地表面である現代の耕作土 (第 1 層) が約 45 m の厚さで堆積する。第 2 層は鎌倉時代の遺物包含層である。さらに下層の第 3 a 層は古墳~奈良時代、第 3 b 層は古墳時代後期の遺物を多く包含しており、この第 3 層掘削後の第 4 層上面において古墳時代の遺構を検出した。また第 4 層は無遺物層であり、土層の観察から第 3 b 層、第 4 層が南側に傾斜を持って堆積することを確認した。

遺構は第 4 層上面において検出した土坑 3 基、柱穴 4 基である。遺構内や包含層出土の遺物から考えて古墳時代後期のものと考えられる。遺構面の標高は 4.4 ~ 4.2 m を測る。土坑 1 からは陶器

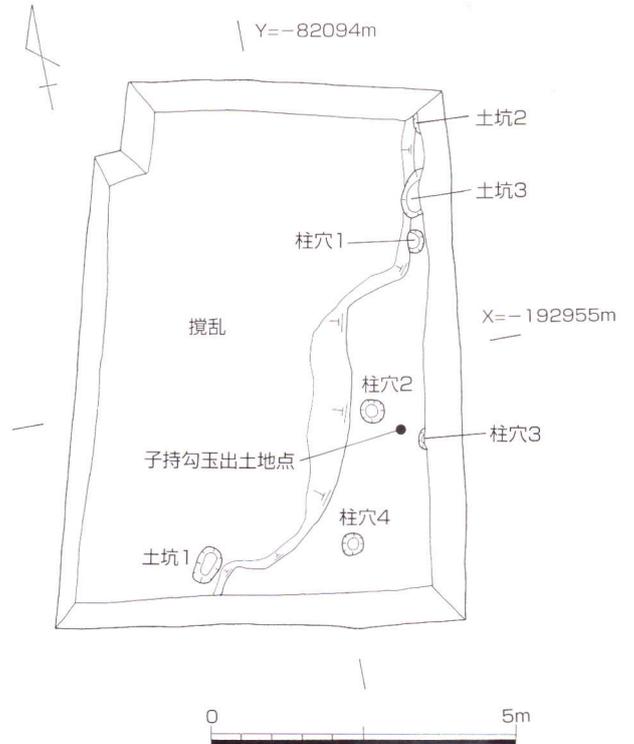


調査位置図

編年の TK209 型式に併行するとみられる須恵器片が、土坑 3 からは丸底 I 式の製塩土器が多く出土している。なお検出した遺構のうち土坑としたものについては、柱穴の可能性も考えられる。

遺物は遺物包含層を中心に須恵器、土師器、製塩土器、瓦器、土錘、石器、石製品等が出土しており、また、その他の遺物としてフイゴ、炭、軽石、貝類、魚介類、また鹿や猪とみられる獣骨や馬の歯もみられる。時期としては古墳時代後期から奈良時代のものが多くみられ、その量はコンテナに約 10 箱を数える。遺構に伴う遺物は細片が多く図化できなかったが、陶器編年 TK209 型式の須恵器や丸底 I 式の製塩土器などが出土している。

出土遺物の中で特筆すべきものとして、滑石製の子持勾玉がある。出土位置は調査地のほぼ中央東端で、第 3 b 層から出土した。平面形は C 字状であり、断面は方形を呈する。色調は暗青灰色である。法量は全長 12.0 cm、幅 7.8 cm、最大厚 3.2 cm、重さ 260 g、子勾玉の長さは 2.2 ~ 2.8 cm、高さは 5 ~ 8 mm を測る。子勾玉は両側面、背面にそれぞれ 5 個ずつ、計 15 個配され、ヘラ状工具により連続して作り出されている。また腹部には、子勾玉の代わりに長さ 1.4 cm の柱状の突起がみられる。紐穴の穿孔幅は 4 mm で、両面から穿たれている。本例は出土した遺物包含層の時期から 6 世紀代のものと考えられるが、子勾玉が鱗状に連続して明確な単位を持たず、全体的に簡略化の傾向が窺える。



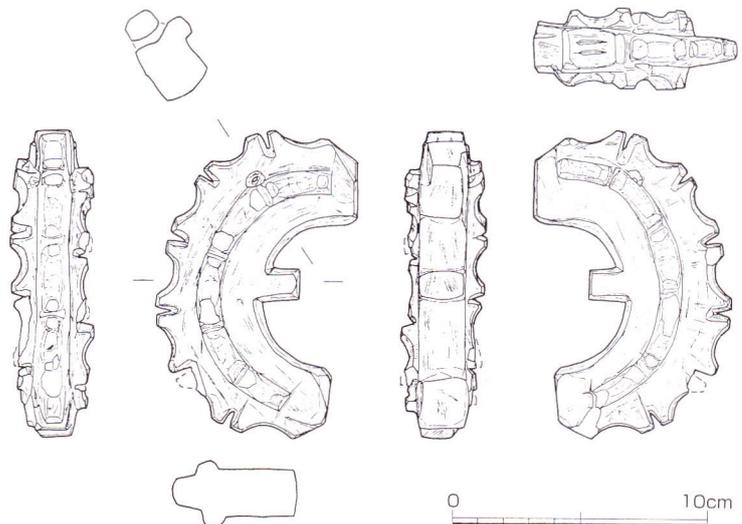
遺構平面図



子持勾玉出土状況

まとめ

周辺で行われた調査では、北側約 50 m の地点において竪穴住居群が、西側約 150 m の地点において石敷製塩炉が多く検出されている。周辺の状況と今回検出した遺構を勘案するならば、今回の調査地は居住域の縁辺部で、作業域との境界付近に相当するものと思われる。(高橋方紀)



遺物実測図

しせきわ かやまじょう
2. 史跡和歌山城 第19次発掘調査

調査地 和歌山市一番丁3番地

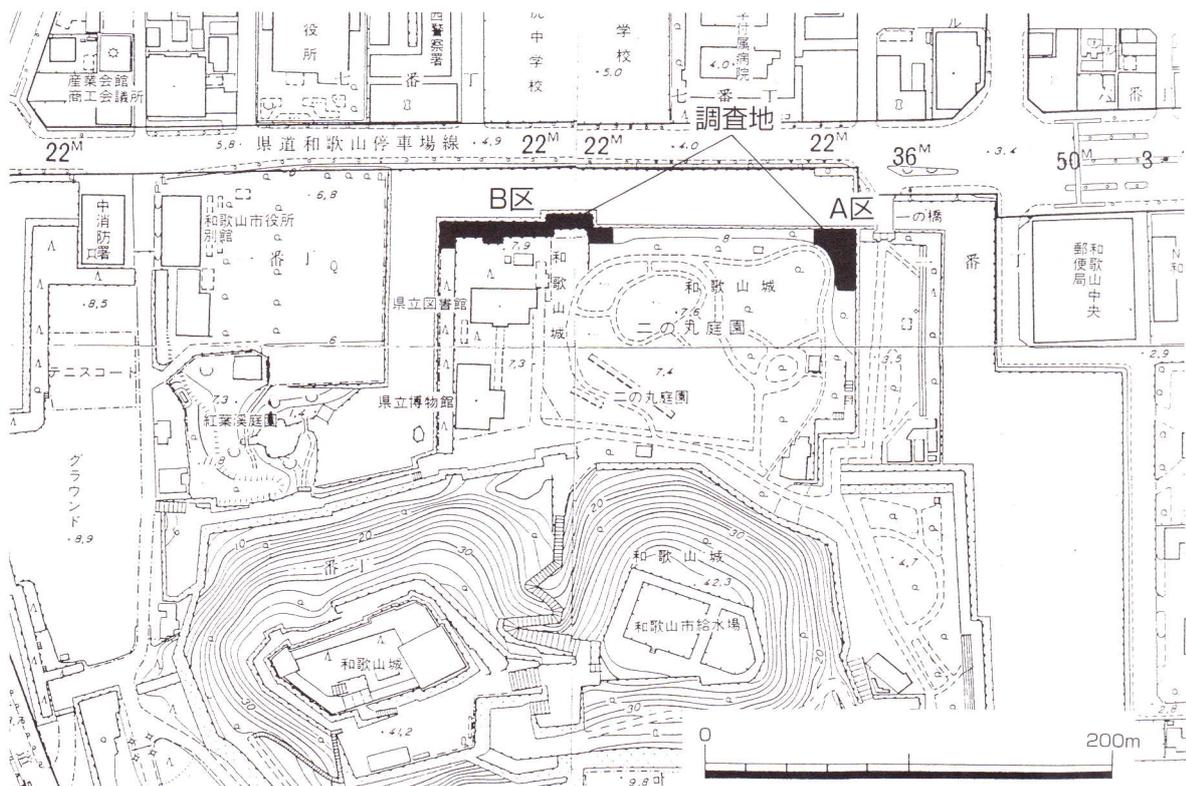
調査面積 1,000 m²

位置と環境

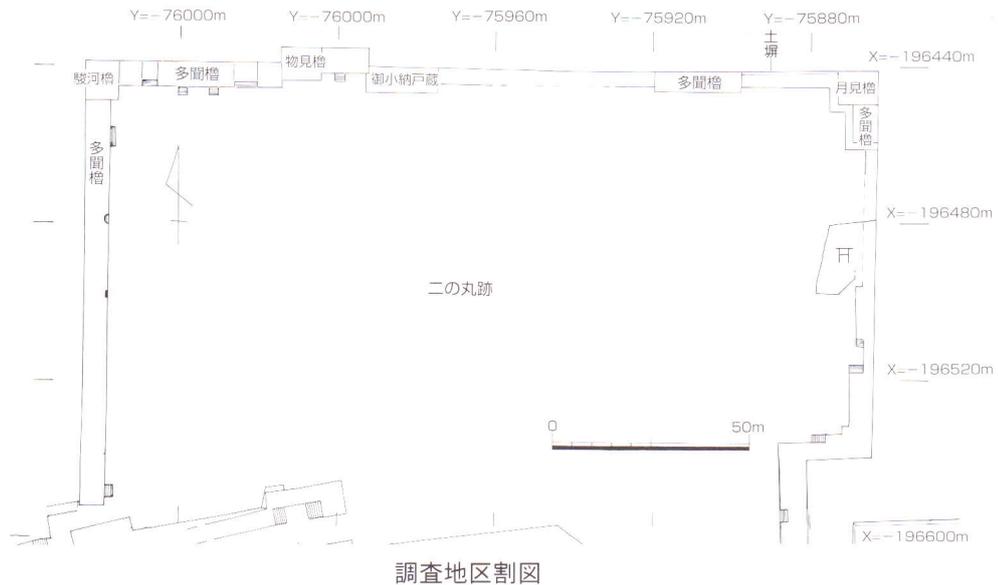
史跡和歌山城は紀ノ川下流域南岸の平野部のほぼ中央に立地する。和歌山城の築城は、天正13(1585)年に紀州を領有した豊臣秀吉によって行われた。秀吉は紀州を異父弟である秀長に治めさせたが、秀長は和泉・大和を合わせて領有したため大和郡山城に在城し、家臣である桑山重晴に城代として入城させた。入国年内には本丸などが完成していたとされるが、詳細は不明である。その後、慶長5(1600)年に関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が、大坂城の豊臣氏を牽制するために浅野幸長を入城させた。入国後の幸長は、大規模な城の普請や城下の建設を行ったとされる。元和5(1619)年に浅野氏は広島へ転封され、それに代わって徳川頼宣が入国し、以後明治6(1873)年の廃藩置県による廃城まで徳川氏における紀州支配が続いた。

調査内容

調査は、二の丸跡整備予定範囲内において行ったものであり、調査地は和歌山城二の丸跡内の北側堀に面した石垣上の櫓台部分である。櫓部分は北東隅の「月見櫓」、北西隅の「駿河櫓」、「駿河櫓」から東へ距離約50mの櫓台上にある通称「物見櫓」の3ヶ所であり、「月見櫓」を中心とした東西約13m、南北約22mの調査区約300m²をA区、「駿河櫓」と「物見櫓」をつなぐ櫓台部分を中心とした東西約68m、南北約10mの範囲約700m²をB区と設定し、合計面積約1,000m²を調査した。



調査位置図



調査地区割図

以下、主要な遺構について記述を行う。

A区の調査対象地は、江戸時代末頃に描かれた「和歌山御城内惣御絵図」から「月見櫓」、「多聞櫓」、「土塀」に関連する遺構が検出されることが予測できたが、明治時代以降の土地利用に伴って埋没しており、調査前には石列状に櫓台二の丸側石垣上部が部分的に露出している状況であった。

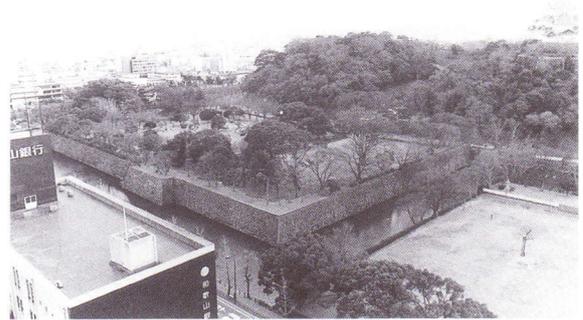
調査の結果、「月見櫓」、「多聞櫓」、「土塀」のほか、新たに絵図に描かれていない櫓台内面（二の丸側）の石垣の構造を明らかにすることができ、新たに検出した二の丸側の櫓台内面石垣側面に26ヶ所、石垣上面に2ヶ所、北側土塀基礎部分に置かれた石材側面に1ヶ所の合計19種類30ヶ所に「刻印」が施刻されていることを確認することができた。

「月見櫓」は東西約10.4m、南北約8.4mの規模を測り、櫓のほぼ中央部で砂岩の礎石を3基検出した。またこの櫓を東西に貫く断層状の亀裂を検出し、この亀裂による櫓の中央部礎石の大きな傾斜や櫓台石垣の陥没を確認した。これは原因の一つとして地震によるものと考えられた。明治初年の古写真に「月見櫓」が確認できることから地震はこれ以降に起こったものと考えられる。また、櫓内の堆積層、石垣、礎石に焼土や赤変した痕跡を確認したことから大規模な火災にあったことを推定することができる。

さらに「月見櫓」の南側において確認した「多聞櫓」は、東西約6.3m、南北約10.15mの規模を測る。内部構造については、砂岩の礎石と礎石抜き取り跡を確認した。また「月見櫓」と同様に



「月見櫓」北面石垣（北東から）



調査地近景（北西から）

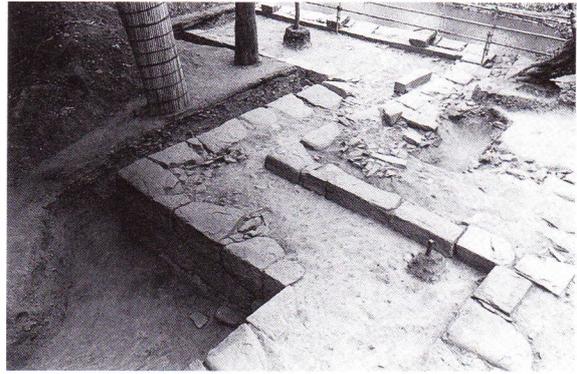
火災の痕跡も確認することができた。また、「月見櫓」櫓台の西側に連結する土塀については、土層観察から基底部では南北幅約80cmの規模を測るほか、石垣上に木材などを使用せず、直に土壁を構築した後に約5mmの厚みをもつ白漆喰を塗っていたことが窺えた。さらに、北堀側の石垣天端において方柱状の石材が約3.05mの間隔で3個、調査区外に8個、合わせて11個設置されているのを確認した。この石材は土塀の狭間に伴う可能性が考えられる。「多聞櫓」櫓台の南側に連結する塀は、「月見櫓」西側の土塀の基礎構造と比較すると、攪乱などの影響で壁土や漆喰、石垣天端に方柱状の石材を確認できなかったが、西側同様の構造を持つ土塀であったものと考えられる。

これらの他、櫓台内面（二の丸側）石垣側に石垣構築に伴うと考えられる埋設石積を1ヶ所で検出した。

B区調査対象地は、絵図から「物見櫓」、「駿河櫓」とこれらに付属建物、「多聞櫓」などに伴う遺構が検出されることが予測できた。

調査区東側では、絵図に記録された「物見櫓」とこの櫓台東側の付属建物、「御小納戸蔵」の西側の一部を調査した。「物見櫓」は東西約9.4m、南北約8.3mの規模を測る。「物見櫓」櫓台石垣は、他の北面二の丸櫓台石垣と比較すると、東西両側で約4.5m分が北側の堀に突出するように築かれているものである。「物見櫓」東側の付属建物は、東西約11.9m、南北約8.05mの規模を測る。この櫓台南面の石垣には東西約2.85m、南北約2.05mの規模を測る階段1がとりついている。また、「御小納戸蔵」から東側の櫓台は、西側より約70cm石垣が低く積まれていた。「御小納戸蔵」は、南北約6.6mを測り、東西約3.2mの範囲を調査した。

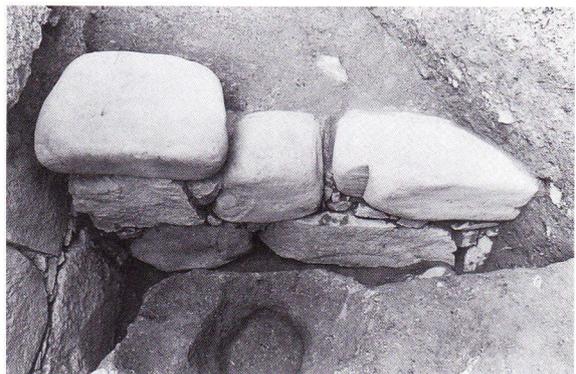
調査区西側では、東西約6.15m、南北約6.3mを測る「駿河櫓」東側付属建物を検出し、この櫓台下面において、「塼敷」を検出した。また建物の東



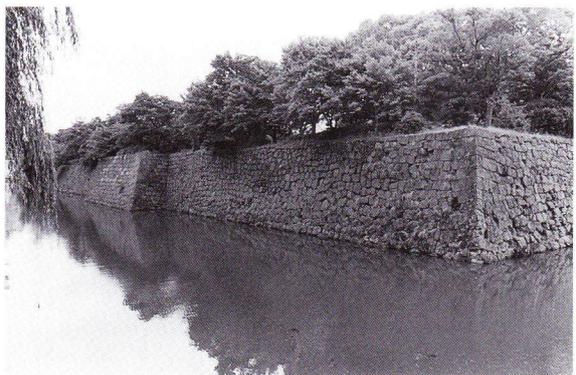
「月見櫓」櫓台・土塀（南東から）



石垣沈下状況（西から）



埋設石積・櫓台石垣基底部（北から）



「物見櫓」から「駿河櫓」にかけての北面石垣（北西から）

西両端は、長さ約 20 cm、厚さ約 3 cmを測る「L」字状の瓦によって区画されていた。この「L」字状の瓦に沿って、約 5 mm幅の漆喰を検出し、この建物の壁が漆喰で整えられていたことが明らかとなった。壁の幅は、西側約 50 cm、東側約 20 cmを推定することができ、東西の壁の厚みが異なるのは、西側が「駿河櫓」と接する部分であるためと考えられる。

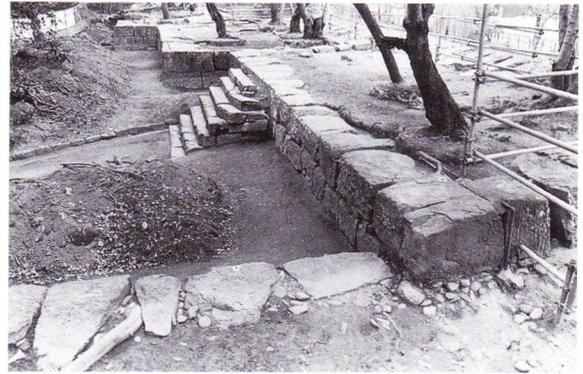
また、この櫓西南角にあたる石垣天端の石材に幅約 20 cm、深さ約 2 cmの「L」字状の溝が彫り窪められていた。このことから、南側の壁の厚さは約 20 cmを推測することができ、東壁とはほぼ同じ厚さであったものと考えられる。この「塼敷」は、建物の土間にあたる床面を塼で整備したものであると考えられる。さらに、この建物東側の階段 5 は石垣に組み込まれており、直方体の砂岩石材を用いて 7 段分積まれていることを確認した。「駿河櫓」櫓台は東西約 8.2 m、南北約 10.2 mの規模を測る。

このほか、土層断面を観察した結果、櫓台内部の結晶片岩で整地された石材に赤変したものを確認することができ、「駿河櫓」の西面石垣の天端石材にも赤変した痕跡がみられ、火災の痕跡が窺える。また、「駿河櫓」南側の付属建物は東西約 6.35 m、南北 4.85 m以上の規模を測るものである。

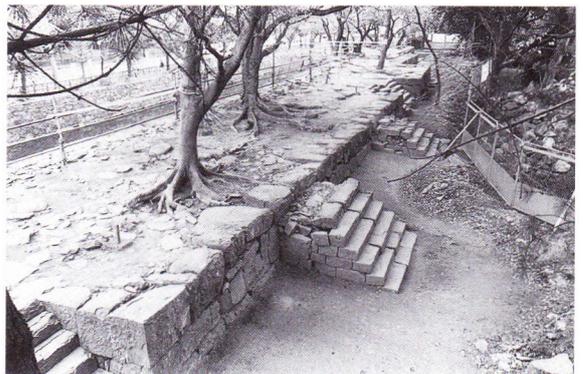
まとめ

調査の結果、櫓台上において多くの礎石を検出し、それぞれの櫓、土塀及び櫓に付属する建物跡などの基礎構造や規模等、二の丸櫓台石垣構築の特徴、櫓台内面（二の丸側）石垣側に石垣構築に伴うと考えられる埋設石積、「駿河櫓」附属建物跡検出の「塼敷」遺構などについて明らかにすることができた。

また A 区及び B 区において、下層調査のためのサブトレンチを合わせて 16ヶ所設定したが、5ヶ所において裏込の結晶片岩礫上面が火を受けた痕跡及び焼土層を認めた。これは、大規模な火災を受けた跡であるとみられ、おそらくは調査区内にあった建造物の多くは被災したものとみられる。江戸時代の当地での火災記録によると、明暦元（1655）年 11 月 13 日のものが状況的に良く一致し、出土遺物についてもそれを裏付けるものである。明治初年撮影の写真に写っている「月見櫓」、「駿河櫓」及び「物見櫓」とそれと一連の土塀、多聞櫓等は火災後に再建されたものと考えられる。今回、和歌山城の実態を明らかにする上で江戸時代後期の貴重な資料の一端を得ることができた。（奥村 薫）



B 区 全景（東から）



B 区 全景（南西から）



塼敷 全景（南東から）

3. 鳴神V遺跡 第7次発掘調査

なるかみ

調査地 和歌山市秋月 318-1 番地 他

調査面積 100 m²

位置と環境

紀ノ川下流域の南岸に広がる和歌山平野は、太田・黒田遺跡、秋月遺跡等多くの遺跡が密集している地域である。鳴神V遺跡は、その中でも花山山塊の西麓に位置しており、調査地周辺では、古墳時代の水田区画や方形区画墓群、素掘りの井戸や土坑、中世の溝や土坑などが検出されている。

調査内容

調査地は、標高約 4.5m を測る沖積平野上にあり、遺跡地図上では鳴神V遺跡と秋月遺跡の境目付近に位置する。和歌山市教育委員会が事前に行った試掘調査の結果、工事予定範囲内でも東側に良好な遺構面が確認されたため、調査区は調査対象地の東側を中心に幅 2.0 ～ 2.5 m、長さ 14.5 m の調査区を 3ヶ所、合計面積約 100 m²を設定し、東より第1区～第3区と呼称した。

調査地の基本的な土層堆積状況は、現地表である現代の整地土（第1層）が 5 ～ 10 cm の厚みを持ち、その下に第2層が約 20 cm、第3層が 15 ～ 20 cm、第4層が 10 ～ 20 cm の厚さでほぼ水平に堆積する。また第2区において下層の状況を確認した結果、調査区北側では第5層が約 15 cm、第6層が 20 ～ 30 cm、また第7層は 50 cm 以上堆積することを確認した。第2～3層は鎌倉時代を中心とした遺物包含層で、第4層は古墳時代後期から奈良時代までの遺物を包含している。第2～4層は堆積の状況から整地土であると思われる。遺構は第4層上面において鎌倉時代の遺構（第1遺構面）を検出、第5層上面で古墳時代の遺構（第2遺構面）を検出した。遺構面の標高は、第1



調査位置図

遺構面で3.8~4.0m、第2遺構面で3.6mを測る。

第1遺構面

溝1 第1区北側において検出した。幅約70cm、深さ15cmの東西に延びる溝である。単層の覆土には瓦器が含まれており、鎌倉時代に埋没したものと考えられる。底部からは弥生土器の直口壺が出土しているが、これは下層からの混入の可能性が考えられる。

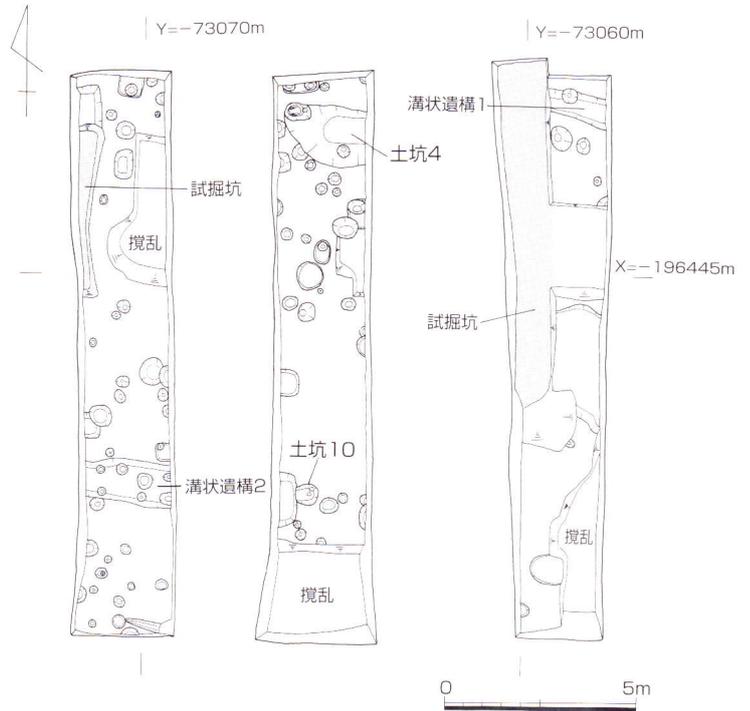
溝2 第3区南側において検出した。幅110cm、深さ10cmの東西に延びる溝である。覆土は単層であり、遺物から鎌倉時代に埋没したものと考えられる。

溝3 第3区南端部において検出したもので、幅20cm、深さ5cm、検出長90cmを測る。

土坑4 第2区北側において検出した不定形の土坑である。南北長160cm、東西検出長210cm、深さ40cmを測る。

土坑10 第2区南側において検出した。南北長50cm、最深部35cmを測る不定形の土坑で、西側は土坑11に切られている。覆土からは瓦器椀と土師器の皿が一括出土している。

ピット群 覆土はほぼ同一である。瓦器の小片を含むものがほとんどである。



第1遺構面平面図

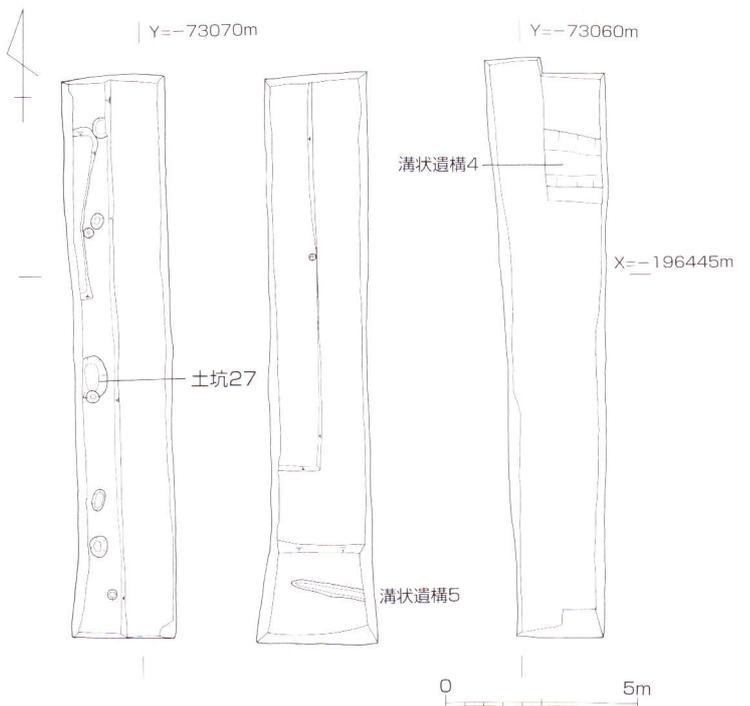
第2遺構面

溝4 第1区北側において検出した。幅140cm、深さ20cmの規模を測るもので東西の方向性を持つ。第2・3区においてはこの溝の延長部分を検出できなかったことから、北側に屈曲するか、もしくは不定形の土坑になる可能性もある。

溝5 第2区南端部の攪乱部分を除去した後に検出した。大部分が削平を受けており検出できたのは底の一部のみである。

土坑27 第3区中央付近において検出した不定形の土坑である。南北幅100cm、深さ15cmの規模を測る。遺物には弥生土器、土師器・須恵器が出土している。

ピット群 第3区を中心に合計6個検出した。須恵器ではTK43型式併行期の



第2遺構面平面図

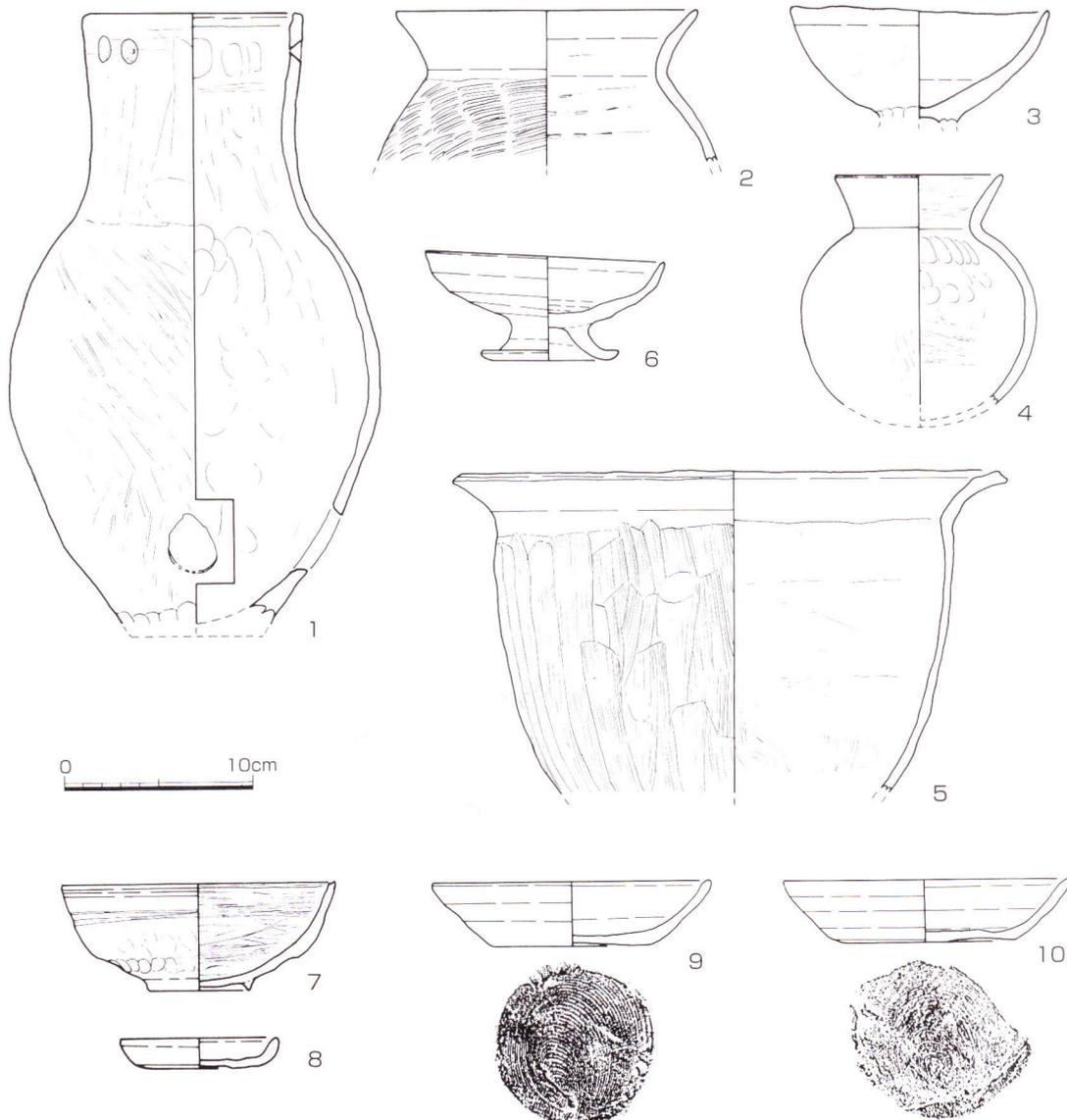
杯身が出土している。

遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳・奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の土師器・瓦器などが遺物収納箱（コンテナ）に約6箱出土した。以下、時代順に主要な遺物を説明する。

1は弥生土器直口壺で、口径11.8cm、残存高32.7cmを測る。溝1から出土した。外面の体部にはミガキ、口縁から頸部にかけては縦方向の板ナデのちナデ消しが施されており、内面はナデにより調整される。また体部下位には外面からの穿孔、口縁上部には回転運動により施された直径1.2cmの穿孔が2ヶ所みられる。紀伊第IV様式併行期とみられる。

2・3は庄内式併行期の土器である。2は土坑27から出土した甕で、口径16.0cmを測る。色調は淡褐色で外面体部には右上がりのタタキ、口縁部及び内面はナデによる調整がみられる。3は脚付の鉢で口径13.6cmを測る。器表面は磨滅しているが、外面にはタタキ調整が確認できる。土坑3から出土した。

4・5は土師器である。4の壺は口径8.8cm、最大胴部径12.5cmを測り、色調は明褐色を呈する。内外面とも剥離しているが内面体部下位には板ナデ、上位には指押さえが確認できる。5は口径

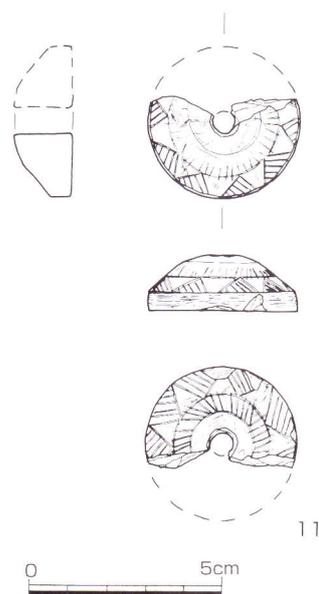


遺物実測図1

28.6 cmを測る甕で体部外面にはススが付着している。口縁部は外反して立ち上がり、端部は調整時のナデにより凹線状に窪んでいる。体部外面にはタテハケが明瞭に残る。6は須恵器の高杯で、口径10.6 cm、底径6.2 cm、器高6.0 cmを測るものである。杯部には全体の約2/3に回転ケズリが施されており、脚部は回転ナデにより貼り付けされる。4・6は遺物包含層（第4層）、5は試掘調査時に検出した土坑から出土した。

7～10は土坑10出土の遺物である。7は瓦器碗である。口径14.4 cm、高台径5.2 cm、器高5.8 cm、高台の高さは5 mmを測り、色調は暗灰色を呈する。外面は口縁部がナデにより仕上げられており、高台付近には指頭圧痕が明瞭に残る。また内面には口縁端部内側に沈線が1条巡っており、側面には平行線暗文、見込みには連続輪状の暗文を施す。8は土師器の小皿で、口径8.3 cm、器高1.7 cmを測るものである。褐色を呈し、底部にはヘラ切り痕を残す。9・10は土師器の皿である。9は口径14.5 cm、底径8.2 cm、器高3.4 cm、10は口径15.0 cm、底径9.7 cm、器高3.4 cmを測る。どちらも回転ナデによる調整で、底部に静止糸切り痕を残す。色調は明褐色を呈する。以上の遺物は瓦器碗の年代観から12世紀前半のものと考えられる。

11は遺物包含層（第4層）から出土したもので、暗緑色を呈する滑石製の紡錘車である。直径4.0 cm、高さ1.5 cm、中心孔径6 mmを測る。上面及び下面には鋸歯文が施されており、側面には整形の際の擦り跡が残る。また上面部は使用による磨滅のため光沢を帯びている。中心孔には錆が付着しており鉄製の軸棒を組み合わせていたと考えられる。



遺物実測図2

まとめ

発掘調査の結果、調査区において溝状遺構、土坑、ピットなどの遺構を検出した。特に鎌倉時代の遺構を多く検出しており、建物の存在が指摘できる。また下層調査において、古墳時代中期の遺構が確認できた。調査地より約200 m南西で和歌山市教育委員会が行った秋月遺跡第4次調査では、古墳時代の方形ないし隅丸方形のプランを持つ竪穴住居址が密に検出されており、今回検出した遺構はこの秋月遺跡の古墳時代集落の一部の可能性が考えられる。

土層の堆積状況を観察すると、第1～4層は整地のために人為的に運ばれた土であることから、鎌倉時代から整地を繰り返して土地利用を行っていたものと考えられる。また第6層以下は北側に向かって傾斜することが確認できることから、本来調査地より北側は低地であったと思われる。

今回の調査により以上の成果を得ることができた。なお、調査地の周辺は秋月城の推定地であったため関連する遺構の出土が想定されていたが、城の存在を直接示唆する遺構は検出できなかった。

『紀伊続風土記』によると、秋月城は文明年間（1469～87年）に国造紀俊連が築いた城で、現在の日前宮の北東と耕月寺の間に位置したとされている。しかし今回の調査成果によって、従来推定されていた秋月城の範囲を考え直す必要が生じてきている。秋月城の範囲を確定するためにも、今後の周辺における調査の進展が期待される。

（高橋方紀）

4. 山口遺跡 第6次調査

やまぐち

調査地 和歌山市里146番地

調査面積 214 m²

位置と環境

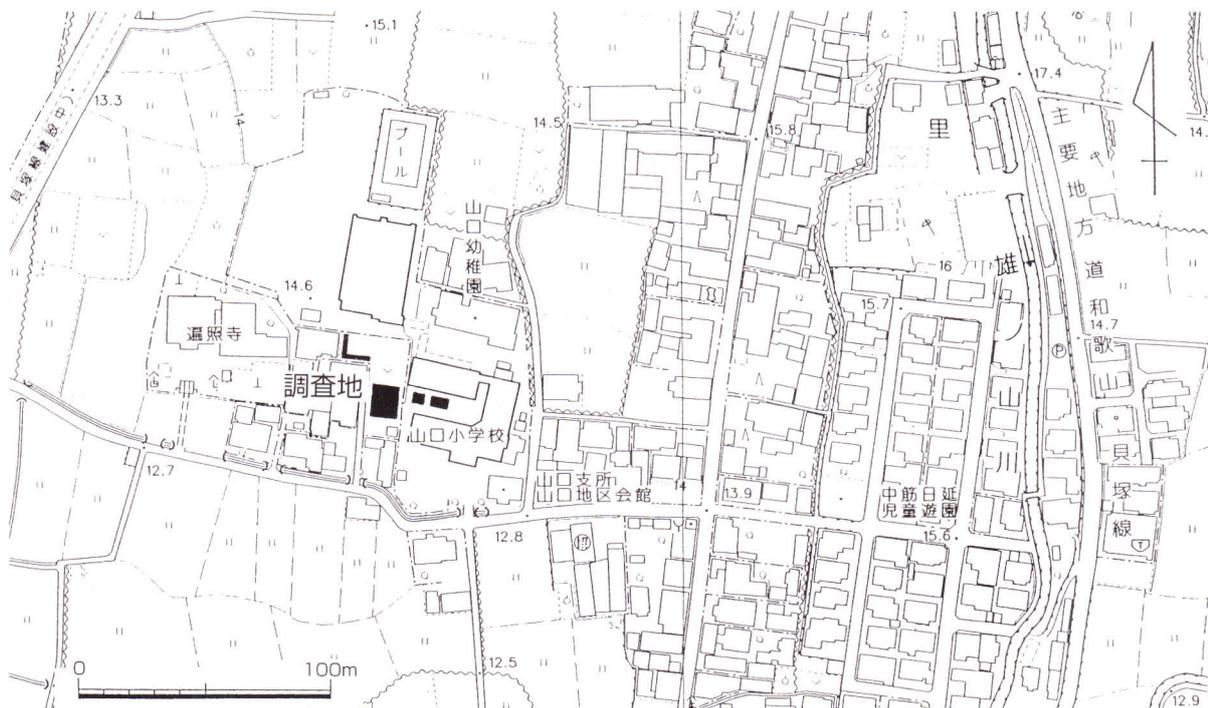
山口遺跡は和歌山市の北東端、那賀郡岩出町との境界近くに位置し、雄山峠に源をもち、南下する雄山川によって形成された扇状地上(標高13~14m)に立地する。遺跡の範囲は東西約600m、南北約600mの規模をもつ。当遺跡では山口小学校に関する発掘調査が、これまで5次にわたり行われ、弥生時代から江戸時代にかけての数多くの遺構、遺物を検出している。また山口及び里地域は、古代の官道である南海道が東西に横切り、「名草駅」が置かれていたところとされ、北側に位置する雄ノ山峠から南北に横切る熊野街道が交わる交通の要衝であったことなど重要な地点であったものとみられる。また同小学校の敷地周辺は中世には地頭易井氏、近世には浅井氏の居宅、その後紀州徳川氏の別邸山口御殿が存在した地点でもある。今回の調査地は既往の調査地点のなかで最も南西部に位置する地点であり、山口御殿推定地の範囲内やや西寄りに相当する。

調査内容

調査区は、最も東側の山口小学校の敷地内に位置する第1区、その西側の第2区、第2区の北西に位置する第3区の3ヶ所に設定した。

基本層序では、第1~3区を通して類似した様相がみられた。表土である整地土以下の状況は、近代以降の堆積層(第1・2層)があり、その下層に江戸時代後期頃の遺物包含層(第3層)が検出できた。この第3層は10~15cmの厚みをもつ暗灰黄色系の粗砂混シルトであり、砂岩礫が多く含まれている。この土層の下面が江戸時代の遺構を多数検出した第1遺構面である。

第1遺構面では、第1区において溝1条、土坑1基、ピット4基などを検出した。第2区では、



調査位置図

調査区を東西に横切る溝 2 条や土坑 3 基のほか、幅約 1.2 m の間隔をもって東西に平行にのびる石列 2 条を検出した。この石列は磁北 $N-75^{\circ}-W$ の方向性をもつもので、遺構面に石を置き並べられた状況で検出した。この 2 条の石列は、山口御殿に関する土塀等の基礎石の可能性が高いものとみられる。このほか、第 3 区では、ピット数基を検出した。

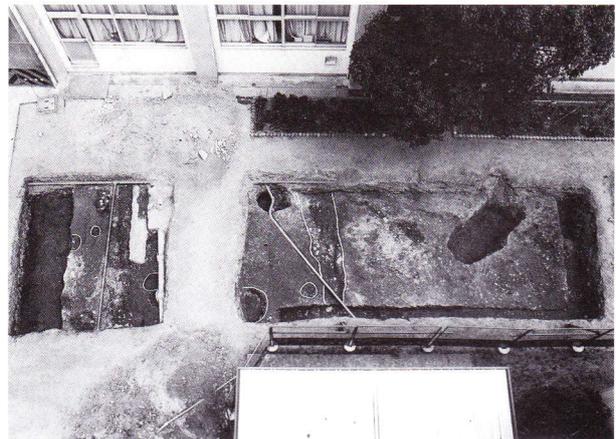
第 1 遺構面を上面に形成する第 4 層は室町時代末期から江戸時代初頭にかけての遺物包含層であり、第 1 区では 5 cm 程度と薄く堆積しているのに対し、第 2・3 区では 20 cm 前後と厚くなる。この第 4 層の下面が室町時代の遺構を検出した第 2 遺構面である。

第 2 遺構面では、第 2 区北半部において建物に伴うとみられるピット列や土坑 3 基、調査区南端において東西方向の溝などを検出した。建物に伴うとみられるピット列では、3 条のものが等間隔で規則性をもち並ぶ。これらには、直径 70 ~ 100 cm で間尺 2.8 m を測り、主軸が磁北 $N-70^{\circ}-W$ のものがある。このピット列は、ともに 10 cm 程度と浅く掘削されたもので、根固め状のピットとみられ、本来上部には礎石が置かれていたものと考えられる。また、調査区南壁に沿って検出した溝は、最終埋没が江戸時代であるものと考えられるが、掘削された時期が室町時代に遡る可能性が高く、ここでは第 2 遺構面に対応する遺構と捉えた。この溝は調査区南壁に沿って東西に横切る溝であり、幅 2.4 m、検出面からの深さ 60 cm 程度を測り、方向性は磁北 $N-70^{\circ}-W$ であり、その流路方向は底面の比高差より西から東であった可能性が高く、現存する溝とは逆の方向性であったものとみられる。また第 3 区においても、土坑 1 基とピット 2 基を検出した。これらの遺構は、第 4 層および第 5 層出土の遺物からみて、平安時代から室町時代にかけての遺構と考えられ、その盛期は南北朝時代から室町時代頃にあるものと考えられる。

さらに下層の状況は、5 ~ 6 単位に細分で



調査地区割図



第 1 区 第 1 遺構面全景 (南から)



第 2 区 第 1 遺構面全景 (東から)

きる第5層が堆積する。この第5層は厚さ5～30 cmを測る礫層と5～10 cm程度の厚みをもつ粗砂層の互層となり、第2区の南壁面下に設定したサブトレンチ内の土層観察から60 cm程度の厚みをもつことが確認できた。この第5層は弥生時代から平安時代にかけての遺物を含む土層であり、その検出状況から土石流等によって一気に堆積した自然堆積層と考えられる。第5層下の状況は、古墳時代の遺物を少量含む第6層が堆積し、この第6層の下面が第3遺構面である。

第3遺構面は、第2区の南東隅に東西3 m、南北3 mのグリッドを設定し、この部分において調査を行った。この結果、グリッドを南北に貫く水田畦畔を2.5 m分検出した。この畦畔は、基底部で幅60～70 cm、上端部で幅30～40 cmを測り、また高さは10～15 cmである。この畦畔の東西両側が水田区画とみられた。この水田が機能していた時期は、直上の遺物包含層(第6層)の出土遺物が古墳時代の後期に比定できることと、下層の遺物包含層(第7層)の出土遺物が弥生時代後期とみられることから、少なくとも弥生時代後期から古墳時代後期の範疇におさまるものと考えられた。

第3遺構面以下の状況は、弥生時代後期の遺物を含む灰色粘土(第7層)、無遺物層とみられる暗緑灰色粘土(第8層)となる。

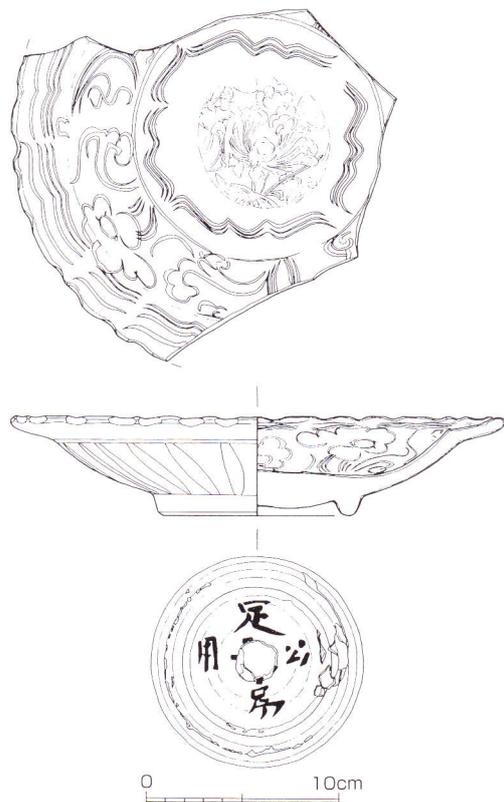
今回の調査で出土した遺物は、弥生時代後期から江戸時代に至る時期のものを多数検出した。土器は、弥生時代後期から古墳時代にかけてのものでは壺・甕・高杯・甑などが、奈良時代から平安時代のものでは土師器の杯・皿や須恵器の蓋杯・壺、黒色土器、中国製の白磁碗などがあり、鎌倉時代から室町時代のものでは、土師器の皿や釜、瓦器碗や瓦質土器の甕・鉢、また輸入陶磁器である中国製の青磁、染付の碗・皿・盤が一定量出土した。国産の陶磁器では瀬戸美濃系の灰釉皿や天目茶碗、備前焼の盤・壺・挿鉢、丹波焼の壺などがある。江戸時代のものでは唐津焼



第2区 第2遺構面全景(東から)



青磁盤出土状況(上が東)



遺物実測図

の皿、肥前系の染付碗や丹波焼の播鉢がある。土器以外のものでは、室町時代のものとみられる瓦が多数出土した。また特筆すべきものに中国製の青磁盤がある。この青磁盤は、口径 25.2 cm、底径 9.6 cm、器高 5.2 cm を測るもので、外面に幅広の蓮弁文をもち、内面にはヘラ描きによる草花文が施されている。また見込み部には牡丹が浮彫により描かれている。また高台部は全面に施釉後、内面を輪状に削り取ったもので、内部に朱書きによる「定口房公用」の文字が書かれている。



第2区 第3遺構面水田遺構（東から）

まとめ

今回の調査では、遺構面を3面検出し、それぞれの遺構面において重要な成果を得た。

まず第3遺構面では、弥生時代後期から古墳時代後期の範疇におさまるものとみられる水田区画と南北方向にのびる畦畔を検出した。この水田は、当調査地から約100 m北側に位置する第5次調査において検出されている弥生時代後期を中心とした集落との関連性が考えられた。そして、この土層におけるプラント・オパール分析の結果、当初耕作層と考えていた土層の直下層においてイネのプラント・オパールを検出した。この結果から、さらに時期が遡ることが判明し、先述の集落に関連する水田の可能性が高まったものといえる。

第2遺構面では、多くの遺構、遺物が検出されている。なかでも、礎石をもつ建物が存在した可能性が高く、瓦葺きの建物であったものと考えられる。文献史料には、和歌山市田屋の「森家文書」康永二(1343)年の条に「山口与一入道明教」の名がみられ、南北朝時代前期に守護被官であったことが記されている。また『大乘院寺社雑事記』の明応二(1493)年の条に「山口城」の記載がみられ、畠山尚順が在城していたことが記されている。このように、当地周辺には山口御殿以前に当時の権力者の屋敷地が存在したものとみられ、この屋敷地が山口氏や畠山氏の時代に併行するものと考えられるが、正確な位置づけが今後の課題の一つといえる。また高台内部に「定口房公用」の文字が朱書きされた青磁盤は、13世紀後半から14世紀前半頃に位置づけられるもので、この文字には公に用いられたとみられる「公用」と何らかの施設に関係するとみられる「定口房」との組み合わせであったものと考えられる。

最後に、山口御殿に関係するものとして、位置的には第1・2区は御殿正面付近に、第3区は山口御殿本体の中央やや西に位置するものと推定された。第1遺構面では、第2区において調査区を東西に横切る2条の石列を検出し、この石列が土塀状の基底部に相当するものと考えられた。この石列が、中御門から西にのび、「L」字状に折れ曲がるライン付近に位置することから、御殿を囲うような施設とみられ、形状から土塀状のものであるものと考えられる。また第2・3区では御殿に関係するとみられる明確な施設は検出できなかった。（井馬好英）

【参考文献】

『山口遺跡 第6次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 1999年

5. ^{なるかみ}鳴神V遺跡 第8次調査

調査地 和歌山市鳴神 1027-1～1027-3 番地

調査面積 60 m²

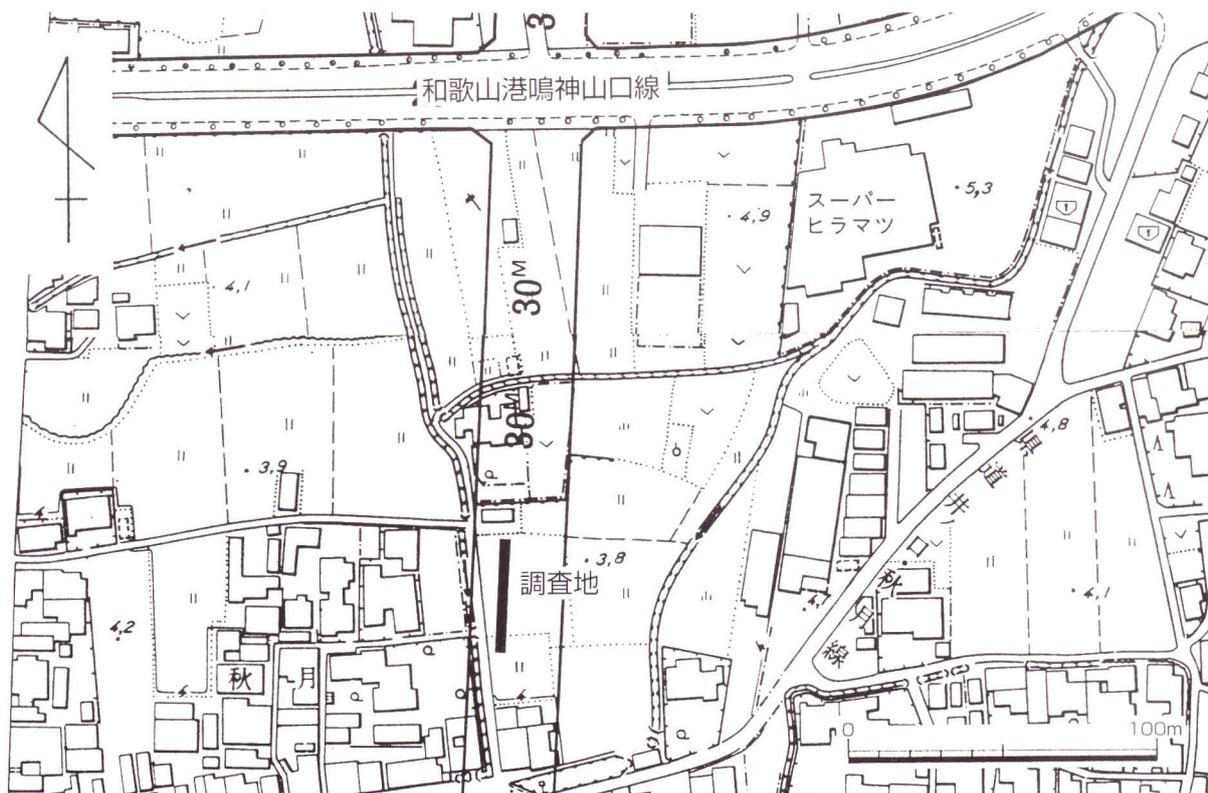
位置と環境

紀ノ川下流域の南岸、東に花山丘陵を間近に望む和歌山市秋月・鳴神地区一帯は、古墳時代から江戸時代にかけての遺跡が密集する地域である。今回調査を実施した鳴神V遺跡は、東西約500m、南北約300mの範囲に広がる古墳時代を中心とした集落遺跡である。また西に隣接する秋月遺跡は、継続的な調査の結果、遺跡の西側では全国的にみても初現期に位置付けられる前方後円墳が確認されており、さらに東側では弥生時代前期から江戸時代にかけての遺構が密集して検出され、当遺跡との関連が注目される遺跡である。

調査地周辺における過去の調査では、昭和52～54年にかけて和歌山港鳴神山口線建設に伴い和歌山県教育委員会が発掘調査を実施している。この調査において、古墳時代から奈良時代の溝状遺構・土坑が検出された。また当財団が平成5年に行った第2次調査（試掘調査）では、調査地一帯には室町時代から江戸時代前期の遺物包含層が確認されており、調査地の北側隣接地において実施された第3次調査では、古墳時代の方墳や水田、奈良時代の掘立柱建物、鎌倉時代の溝・井戸、江戸時代の溝などが検出されている。

調査内容

調査地は、北から南にかけて低くなる傾斜地であり、調査区は調査対象地の西寄りに幅2m、長



調査位置図

さ 30 m のトレンチを 1 ヲ所設けた。基本層序は、第 1・2 層が現代の畑作にともなう耕土と床土であり、第 3 層は現代の造成土である。第 4a・4b 層は近世・近代の水田耕土と床土であるが、第 4b 層は調査区北側ではみられない。また第 5a 層は江戸時代前期、第 5b・5c 層は室町時代の遺物包含層で、調査区北側では第 5c 層のみが堆積し、南側では第 5a・b 層の堆積がみられた。第 6a・b 層はともに砂層で、第 6a 層は河道の氾濫による堆積と考えられ、わずかながら遺物を含む。第 6b 層は無遺物層である。遺構は第 5a 層上面において江戸時代の溝状遺構 2 条、土坑 2 基を検出した。溝状遺構 2 は南北方向のもので、検出長 18.3 m を測る。上部が削平されているため、非常に浅いものである。溝底面のレベルはほぼ水平である。土坑 2 は調査区の北側で、溝状遺構 1 と接するように検出したもので、全体の形状は不明である。覆土は 2 単位に分かれるものである。

遺物は、遺構及び遺物包含層から弥生土器・土師器・須恵器・中世土師器・輸入陶磁器・瓦器・国産陶磁器・瓦・石器などが出土した。

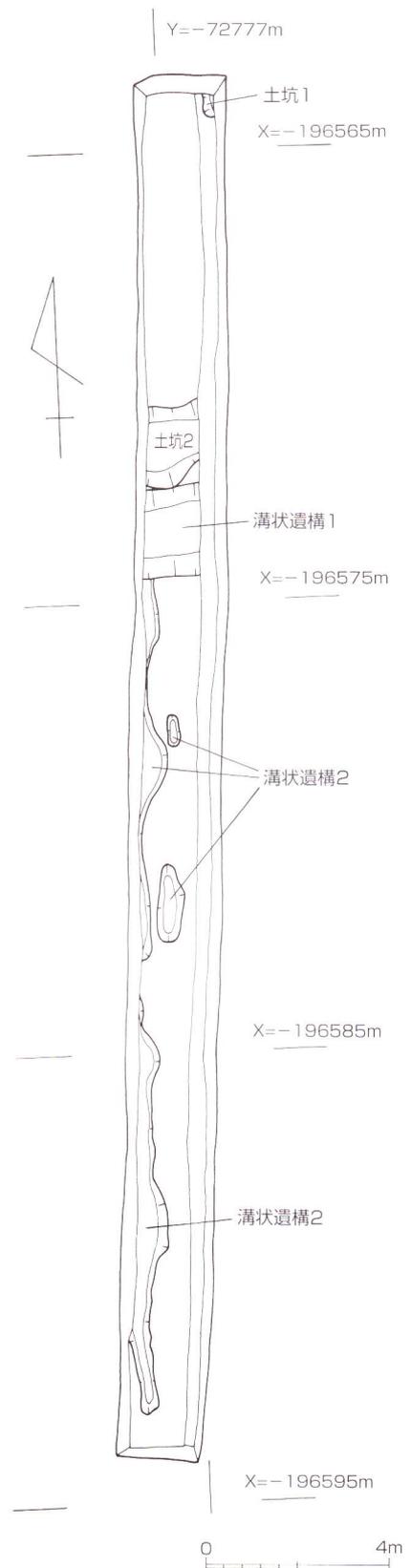
まとめ

江戸時代に埋没したと考えられる溝状遺構 2 は、座標北から N-2°-E の方向性をもつもので、条里地割の方向性を考える上で注目される。調査地の南側には現在も条里地割の名残を残す側溝が南へ延びており、その方向性を踏襲した溝である可能性が考えられる。また調査区北端部分では第 4・5 層が削平され第 6c 層が露出している状況を確認した。よって、今回の調査地は微高地上部の南側に相当するものと考えられ、北側隣接地の第 3 次調査において検出した古墳時代の方墳や水田などの遺構は、微高地上に立地していると考えられる。さらに、第 3 次調査では出土遺物に陶硯などがみられることから、奈良時代から平安時代のある一時期に当調査地周辺には官衙級の施設が存在したことが推定される。

(藤藪勝則)

【参考文献】

- 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 和歌山県教育委員会 1981 年
- 『和歌山県史 考古資料』 和歌山県史編纂委員会 1983 年
- 『和歌山市史』第 1 巻 和歌山市史編纂委員会 1991 年
- 『鳴神 V 遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1994 年
- 『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』和歌山県教育委員会 1996 年



遺構全体平面図

しせきわ かやまじょう
6. 史跡和歌山城 第20次調査

調査地 和歌山市一番丁3番地

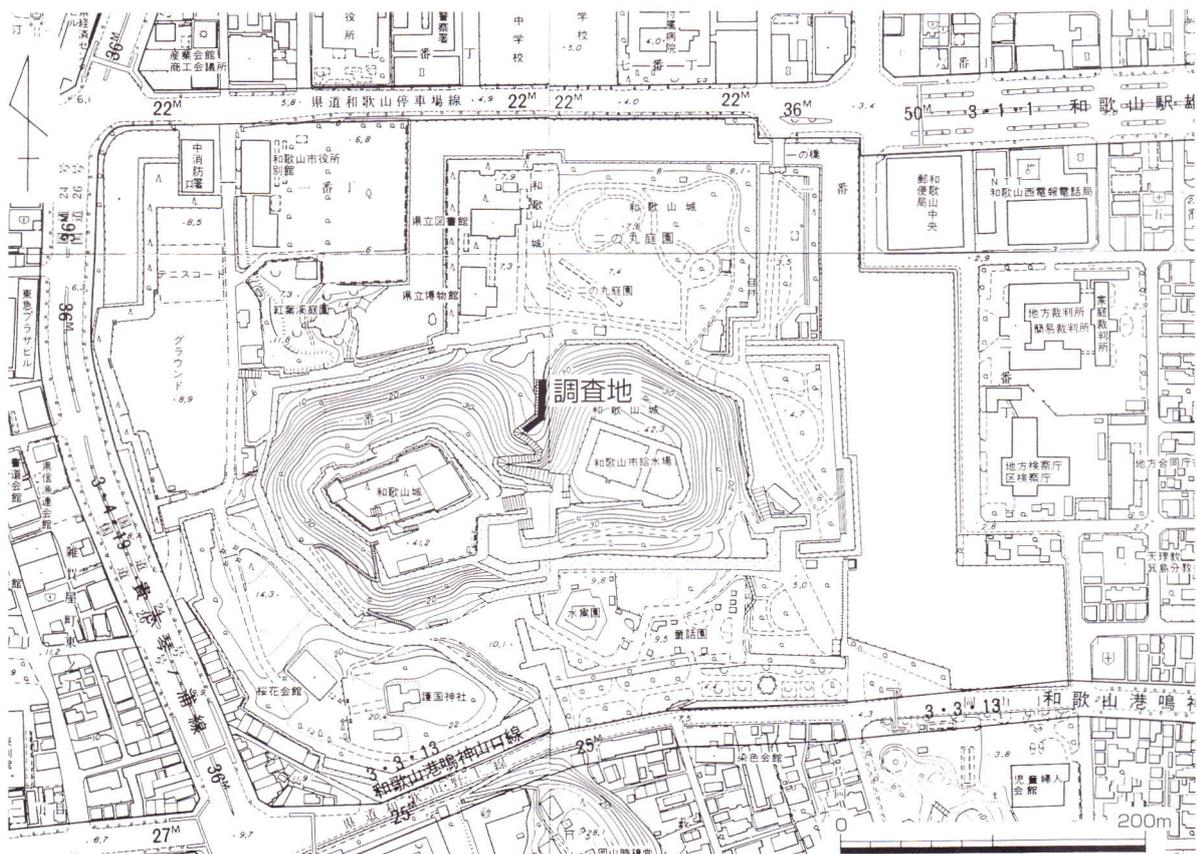
調査面積 110 m²

位置と環境

史跡和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡上に築かれた平山城である。岡上は、東西2つの頂部を持つその景観から虎伏山とも称されており、中央の谷状地形を挟んだ西側には天守閣が、東側には本丸御殿跡が存在する。調査地は谷状地形の北側から天守閣へ至る道である裏坂の登り口付近に位置するもので、坂道の東側と南側に築かれた一連の石垣である。調査は崩落の危険性のある石垣の改修に先立つもので、周辺の遺構確認及び石垣の構造解明を目的として行った。

調査内容

調査は石垣の裾部を第1区、上端部を第2区としてL字状の調査区を設定した。第1区について、基本的な土層の堆積状況は現地表が約5cm、碎石を伴う整地土（第1層）が約5cm、石垣上方からの転落・堆積土とみられる第2層が10～30cmの厚さでみられる。この第2層の下面において北側では岩盤を、南側では石組の側溝を検出した。第3層は側溝の裏込埋土でその下面からは、調査区北側と同様に岩盤を検出した。第2区について、基本的な土層堆積状況は表土が10～60cm堆積しており、上方から転落したと思われる瓦を多く含んでいる。第1層は0～20cmの厚さで堆積する。



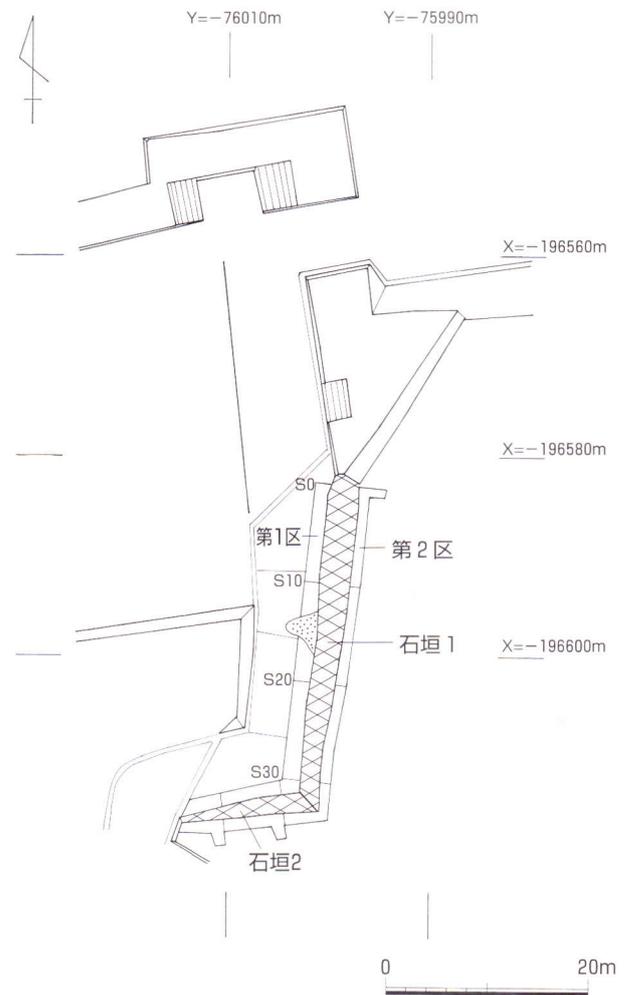
調査位置図

第2層は裏込の埋土であり、色調・土質によって2つに細分できる。この第2層の下面から裏込石（第3層）を検出した。また、S10から30の範囲では岩盤を検出しており、この岩盤を整形して石垣を構築している状況が確認できた。調査区の北端部には第4a層、南側には第4b層が堆積しているが、これは地形的にやや低い部分に施された盛土と考えられた。

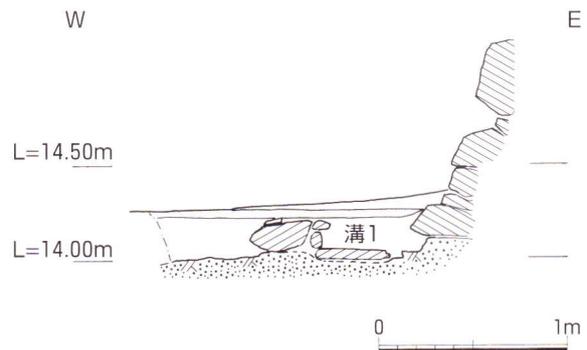
石垣は、割石を野面積みで構築しているもので、石材には結晶片岩を使用している。まず石垣1は南北方向に約30mの規模で構築されている。傾斜角約9度の岩盤上に築かれており、南北の標高差は最大で4mを測る。石垣の高さは約5mである。勾配は北側で約60度、南側で約70度を測り、南側では上部へ行くに従って反りがみられる。次に石垣2は北東から南西方向に約10mの規模で築かれている。基底部の傾斜角は約9度、石垣の勾配は平均68度を測る。高さは東側で5.5m、西側で2mと西に行くほど石垣が低くなる。これら二つの石垣はそれぞれ西側と北西側に面を持ち、約110度の角度でL字状に組み合わせている。また南東の隅部では、石材が交互に組み込まれていることが観察できることから、石垣は同時に築かれたものとみられる。

今回の調査の結果、第1区では石垣1南半分及び石垣2の裾部において石組の側溝（溝1）を検出した。溝1は石垣裾部の岩盤を溝状に成形した後、敷石をし、石垣に向かい合うように石材を組んでいるものである。石材は結晶片岩を使用している。幅約50cm、深さ約20cm、検出長約24mの規模を測り、石垣に沿って構築されているが、石垣1中央部分からは、地表に突出する岩盤に沿うように西側に屈曲している。また石組は2～3段で構成されているが、北端と南西端は削平を受けて敷石のみが残存している。この側溝を構築するための岩盤の成形作業は石垣基底部の構築と一連のものであることから、遺構は石垣と同時期に築かれたものであると考えられる。また坂の造成状況としては、当時の地表面である第3層上面が現在の地表面と同じようにスロープを形成していることが確認できた。

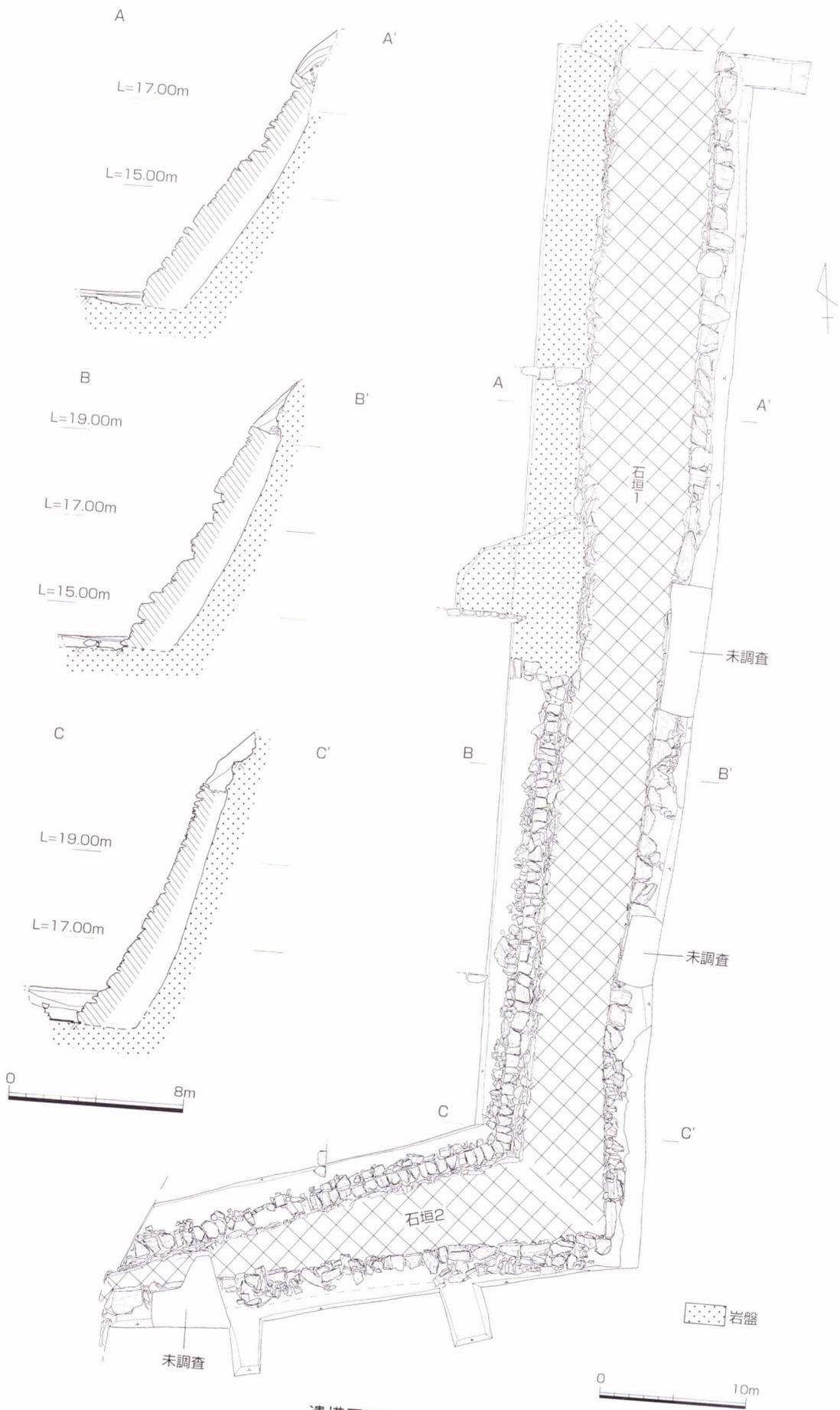
第2区では石垣上部において、裏込石と共に



調査地区割図



溝1土層断面図



遺構平面図

成形された岩盤を検出した。裏込石は石垣の天端近くまでみられ、その石材には石垣本体と同じく結晶片岩を使用している。また石垣解体の際にも、裏込除去後の背面部分において成形された岩盤を検出しており、本石垣は谷状地形の裾の部分の岩盤をL字状に成形して築かれたことが確認できた。

遺物は第2区を中心に、土師器、瓦質土器、焼締陶器、陶磁器、瓦、金属製品が出土しており、また古墳時代の遺物として須恵器片が1点みられる。その他自然遺物として蛤やサザエの貝殻などが出土している。これらの遺物は石垣の上方から転落してきたものと考えられる。

まとめ

今回の調査では、裏坂登り口に位置する石垣の構造及び構築方法を明らかにすることができた。

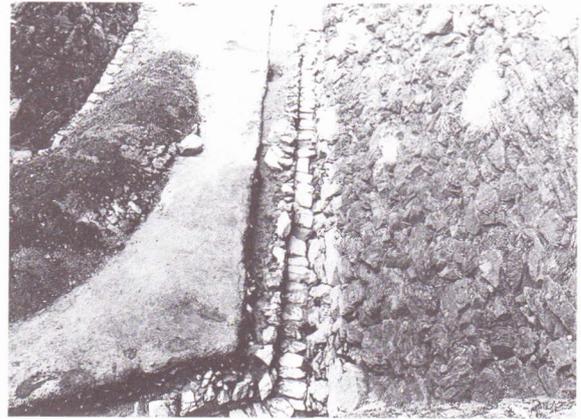
まず石垣の構築方法であるが、整形した岩盤の上に基底石を据える形を基本としている。石垣基底部分は約9度の傾斜で南方向へ上がっており、石材はその勾配とほぼ同様の傾きを持って積まれている。また南東の隅部では、石材が交互に組まれていることが観察できることから、2つの石垣は同時に築かれたものとみられる。石垣解体時に裏込背面部分で成形された岩盤を確認していることから、構築順序としては、岩盤をL字状に掘削した後2つの石垣を交互に積み上げたと考えられる。また裏込石は石垣の天端近くまでみられ、その石材には石垣本体と同じく結晶片岩を使用していることが確認できた。この裏込内からは遺物の出土がなかったが、石材の種類や構築方法からみて、石垣は和歌山城の創建期に成立した可能性がある。

また第1区において石垣周辺の坂の造成状況を確認することができた。当時の地表面である第3層上面が現在の地表面と同じようにスロープを形成しており、石垣に沿って石組の側溝を設けているが、これは御天守一ノ門櫓台石垣の調査（第17次調査）においても同様の状況が確認されている。

(高橋方紀)

【参考文献】

『史跡和歌山城 石垣保存修理報告書』 和歌山市産業部 和歌山城管理事務所 1999年



第1区全景（北から）



石垣基底部（北西から）



第2区土層堆積状況（南西から）

7. 神前遺跡 第3次調査

調査地 和歌山市神前 598 番地 他

調査面積 70 m²

位置と環境

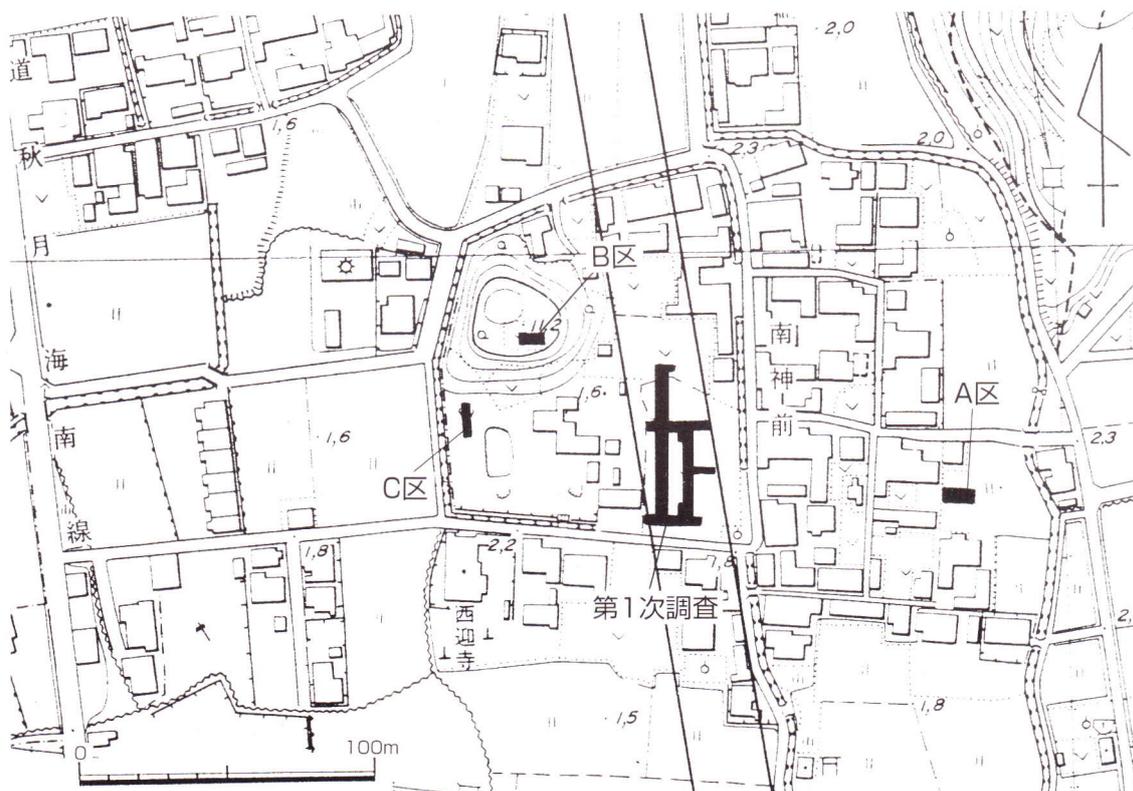
神前遺跡は、和歌山市域のほぼ中央部、紀ノ川の南岸に所在する。この南岸には東西に連なる岩橋山塊があり、その最も西端である独立山塊の福飯ヶ峯（標高約 100 m）の西側平野部に位置する。当遺跡の南側には和歌山市東山東地区の谷部にその源をもつ和田川が西流する。この和田川によって形成された沖積平野のなかの自然堤防上に遺跡が立地する。

周辺の遺跡では、北側に接している弥生時代後期を中心とした井辺遺跡や東側の福飯ヶ峯に約 50 基の古墳で形成された井辺前山古墳群が所在する。

神前遺跡における調査は、過去に 2 度行われており、特に今回の A—C 区のほぼ中間地点における第 1 次調査では弥生時代前期の土坑、後期の溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝、江戸時代初頭の溝などの良好な遺構を検出している。

調査内容

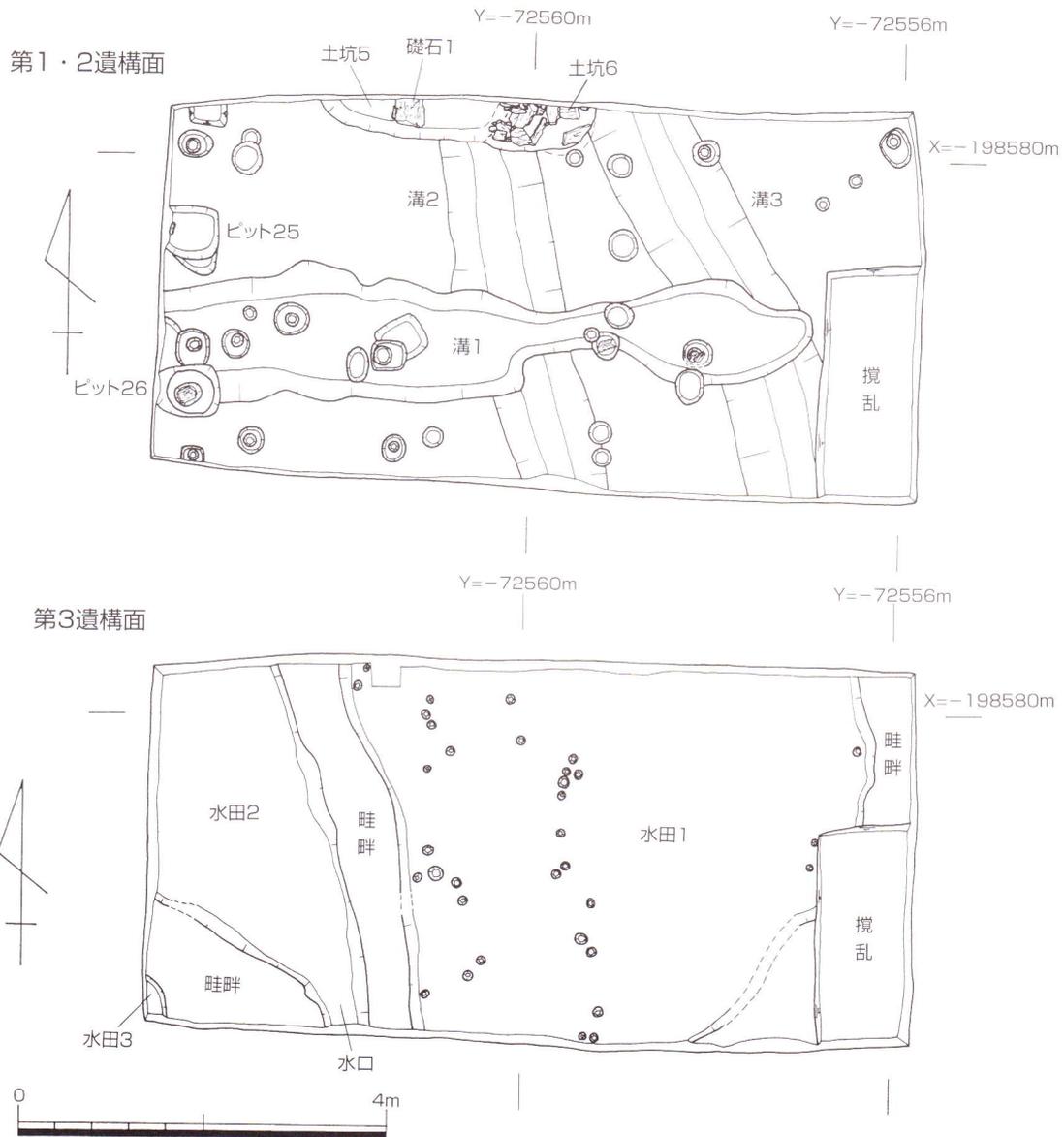
今回の調査区の設定は、目的の異なる 3 ケ所に重点をおいている。この地点ごとの個別の主目的は次のとおりである。A 区は、神前遺跡の東側範囲外に設定した調査区であり、東方への広がりの確認を目的とした。B 区は第 1 次調査地点の北西約 50 m に位置する独立丘陵の頂上部に設定した



調査位置図

調査区であり、この丘陵上の古墳の有無の確認を目的とした。またC区は第1次調査地点の西約50m、B区の丘陵南裾の末端部に位置する調査区であり、第1次調査地点の成果との関連で、鎌倉時代から江戸時代にかけての屋敷地の西方への展開の確認を目的とした。各調査地の現況は、A区が水田、B区が竹林、C区が民家の中庭にあたる。

まずA区は、現代の水田耕土(現水田面の標高は1.9m)の下面が江戸時代の遺構を検出した第1遺構面である。この第1遺構面では、土坑2基(土坑5・6)と礎石1基を検出した。第1遺構面を形成する第2層は、厚さ4cmを測る室町時代の遺物包含層で、にぶい黄褐色系の粗砂を含むシルト質の土層である。この第2層の下面が弥生時代中期から室町時代までの遺構を検出した第2遺構面である。この第2遺構面では、弥生時代中期の溝2条(溝2・3)、鎌倉時代の溝1条(溝1)や掘立柱建物の柱穴の可能性が高いピット25・26がある。また、この第2遺構面を形成する第3層は、厚さ25cmを測る弥生時代中期前葉頃の遺物包含層で黄褐色系のシルト質層である。この第3層の下面が弥生時代前期末から中期初頭の遺構を検出した第3遺構面(標高1.45~1.55m)で



A区遺構全体平面図

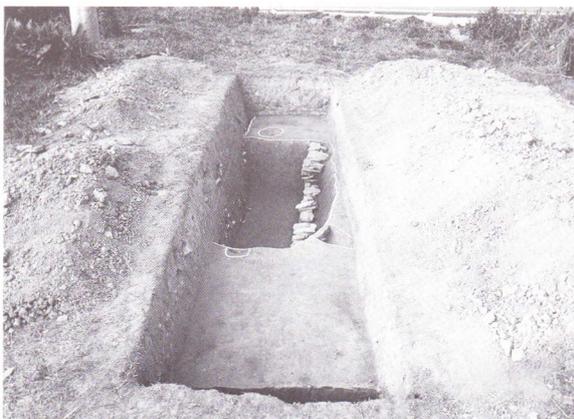
あり、東側から西側にかけて緩やかに傾斜する。遺構は水田区画3単位(水田1～3)と水田1内部において農耕に関係するとみられる杭列を検出した。水田1は調査区中央から東側にかけて検出したもので、東西5.1m、南北4.0m以上を測る。水田2は水田1の西側で検出したもので、水田1との境に幅70～90cmの畦畔を形成する。この畦畔に平行する形で水田1内に杭列を検出した。水田2の南端には幅50cmの水口とみられる括れ部がみられる。また水田3は調査区の南西隅で一部分のみ検出したもので、水田2との間に畦畔をもつものと考えられる。これらの水田は、水田1出土の土器と水田直上の第3層の遺物からみて、弥生時代前期末から中期初頭の範疇である可能性が高いものと考えられる。さらに、下層の第4層(黄褐色系のシルト質)は無遺物層とみられ、厚さ40cm程度の堆積であり、また第4層の下面は、第5層(黄褐色の粗砂)となる。

B区は、標高11.7m前後の独立した丘陵の頂上部に位置する。この頂上部は、東西12m、南北7.5mの長方形を呈する平坦部が形成され、この平坦部を形成するために結晶片岩を用い、高さ40cm程度の石垣がめぐらされている。地表面から30～50cmのところでは結晶片岩の岩盤面を検出し、この岩盤を掘り凹めた9基のピットを検出した。これらのピット内からは江戸時代に比定できる瓦が出土したことから、石垣を含めた周囲の基壇状の平坦部は、江戸時代末期頃に構築されたものと考えられる。

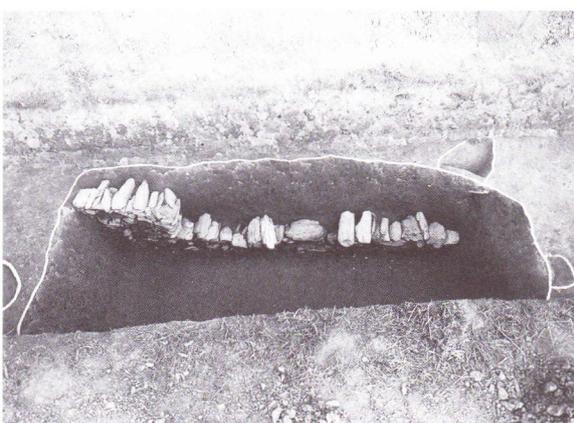
C区は現地表面の標高は2.6～2.3mを測り、北西から南東へ緩やかな傾斜をもつ地形を成している。上層の第1～3層は、結晶片岩の礫と江戸時代の瓦を多く含む堆積であり、江戸時代以降の整地層と考えられる。第3層の下面において江戸時代末期の土坑1基を検出した。第4層は厚さ10cm前後を測る明黄褐色系のシルト質層で江戸時代の堆積とみられる。この第4層の下面(標高1.8m)が室町時代の遺構を検出した遺構面である。土坑3は調査区のほぼ中央部において検出したもので、東西1.5m以上、南北3.7m、深さ70cmを測る方形区画を呈するタメマスとみられる。この遺構は東壁面にのみ小口積みによる石積が構築されている。石積は



B区近景(北西から)



C区全景(南から)



C区土坑3(西から)

北側の一部を除いてほとんど上部が崩れ落ちている。石積の石材は、ほとんどが結晶片岩の割石であるが、少量の和泉砂岩を含み、また瓦が少量含まれている。覆土内には多量の瓦が含まれ、土器では中国製の青磁碗・盤や備前焼の甕の他、石仏1体などが出土し、これらの遺物から埋没時期が室町時代と考えられる。

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代、鎌倉時代から室町時代と江戸時代のものに大きく分けられる。弥生時代の遺物では、A・C区から壺と考えられる破片が数点出土した。鎌倉時代の遺物は、A区で検出したピット群や溝から出土したもので、土師器皿、東播系須恵器、瓦器碗・皿などがある。室町時代の遺物は、C区で検出した土坑3の覆土から多く出土した。土器には瓦器碗、瓦質土器の風炉、備前焼の壺・甕、中国製の青磁の碗・盤がある。瓦は大量に出土しており、その種類としては軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他、雁振り瓦、鬼瓦などの道具瓦がある。また江戸時代の遺物はA～C区の全ての調査区において出土し、その種類には肥前系陶磁器をはじめ、土師器の灯明皿、瓦類、鉄釘、火打石などがある。

まとめ

神前遺跡は、従前弥生時代の遺跡として周知されていたが、平成8年度に行った第1次調査の結果、弥生時代の遺構以外に鎌倉時代の井戸、室町時代の溝、江戸時代初頭の溝などの良好な遺構を検出し、中世から近世にかけての集落遺跡として新たな成果を得ている。

今回の調査では、まず遺跡の東方への広がりの確認を目的としたA区において3面の遺構面を検出し、良好な遺構が明らかに東方へ広がることを確認した。第3遺構面では弥生時代前期末から中期初頭にかけての水田を、また第2遺構面では灌漑的な役割を果たしていたと考えられる弥生時代中期の溝を2条検出した。このことから、A区周辺の遺跡東部は弥生時代前期から中期にかけて水田などの生産域であったことが明らかとなった。弥生時代の水田としては、これまで太田・黒田遺跡や岡村遺跡において検出されており、なかでも最も古い時期のものは、太田・黒田遺跡の中期のものである。当遺跡検出の水田は、弥生時代前期末から中期初頭の範疇におさまるものであることから、県内最古級の水田であることがいえる。また鎌倉時代を中心とする掘立柱建物に伴うとみられるピットを多数検出し、鎌倉時代には確実に集落の範囲内におさまることが確認できた。

次に、B区では丘陵上の古墳の有無の確認を目的としたが、結晶片岩の岩盤を掘り凹めた江戸時代のピットを検出し、丘陵上には古墳が存在しないことが明らかとなった。

C区ではタメマスとみられる土坑3などを検出し、第1次調査地点で検出した屋敷地がC区地点にまで広がることが明らかとなった。

以上のように、今回の調査において各地点ごとに多くの成果が得られた。特に、これまで遺跡範囲外であったA区周辺の遺跡東部では良好な遺構を検出した。今後、遺跡範囲の広がりをさらに確認していくことが課題となろう。

(井馬好英)

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成10年度— 和歌山市教育委員会 2000年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6』—平成8(1996)・9(1997)年度— (財)和歌山市文化体育振興事業団 2000年

8. なるかみ 鳴神V遺跡 第6次調査

調査地 和歌山市秋月 292-1 番地

調査面積 7 m²

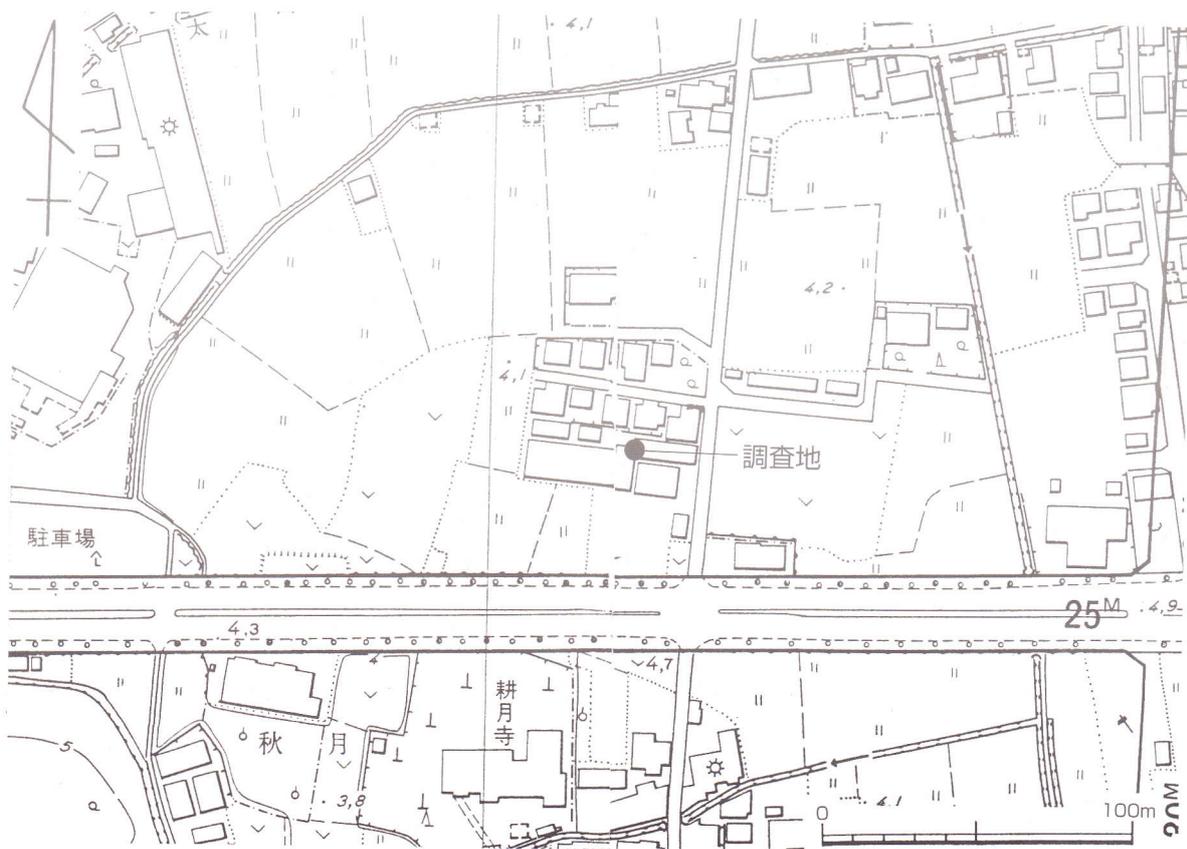
位置と環境

鳴神V遺跡は、岩橋丘陵西方の平地に立地する遺跡であり、西側の秋月遺跡と東側の鳴神IV遺跡に挟まれた位置にある。既往の調査により、古墳時代中期～後期の方墳・円墳、溝、平安時代の柱穴などが確認されている。

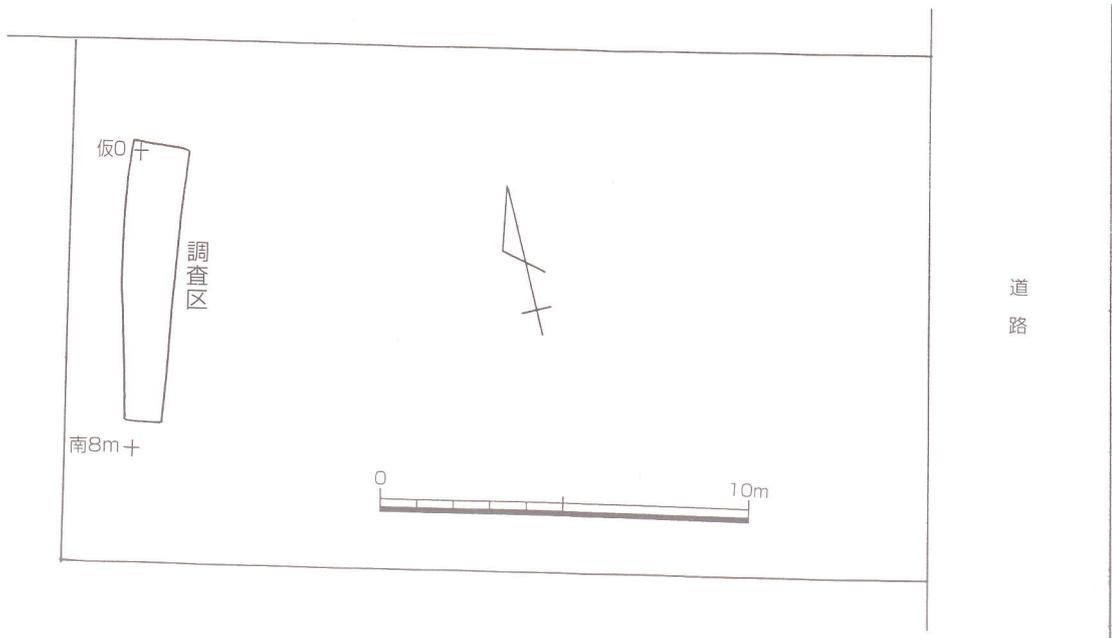
調査内容

店舗建築計画に対処するため浄化槽部分の確認調査を実施した。基本土層は整地層である第1層（厚さ約30～40 cm）、厚さ10～20 cmの淡茶褐色砂質土（第2層）、厚さ約15～30 cmの黒褐色砂質土（第3層）、厚さ20～25 cmの炭混じり灰茶褐色土（第4層）、厚さ30 cm前後の灰茶色砂質土（第5層）、淡灰茶色砂層（第6層）である。遺物は第4層から中世期の瓦器、古墳時代の須恵器、第5層からは古墳時代の須恵器・土師器が出土した。第5層は3層に分層され、上層より炭・焼土混じりの灰茶褐色土層（5 a層）、灰茶褐色砂質土（5 b層）、淡茶色砂質土（5 c層）となる。

検出された主な遺構は、第3層下面の江戸時代の土坑1、第4層中の鎌倉時代の溝1と第4層下面の平安時代の柱穴3、5 a層下面の古墳時代土坑3と土坑3内の土坑4などである。特に注意さ



調査位置図



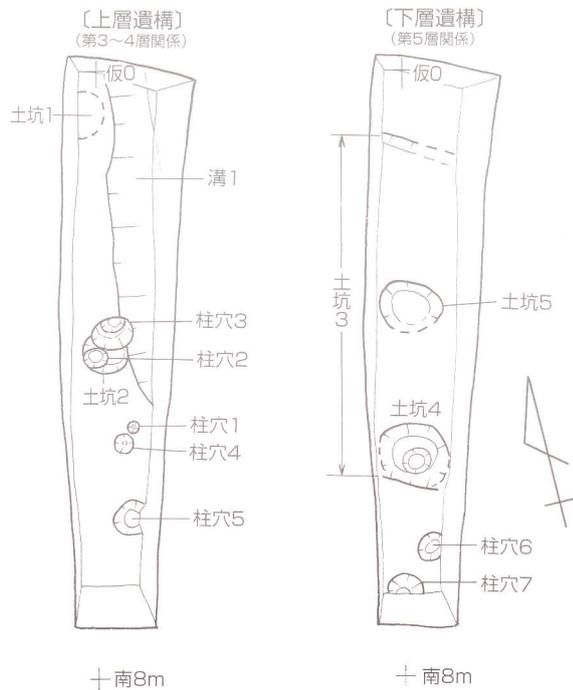
調査位置図

れるのは、土坑3で、幅4.5mの平行にのびる肩部が検出され、深さ約15cmの埋土をもつ。土坑下面が平坦面になり、南側の肩部に接して土坑4が形成されることなどから、竪穴住居になる可能性が考えられた。

まとめ

狭い調査区であったが、溝・土坑・柱穴等の遺構が多数検出された。それらは、时期的にも古墳・平安・鎌倉・江戸の各時代にわたっており、継続的に遺構が形成されていたことがわかる。当該調査区の周辺は大規模な調査歴がないものの、遺構の検出が相次いでいる。面的な調査により濃密な遺構群が検出される可能性が指摘される。

(前田敬彦)



遺構平面図

9. ^{いんべ}井辺遺跡 第4次調査

調査地 和歌山市井辺 131-1 番地他

調査面積 25 m²

位置と環境

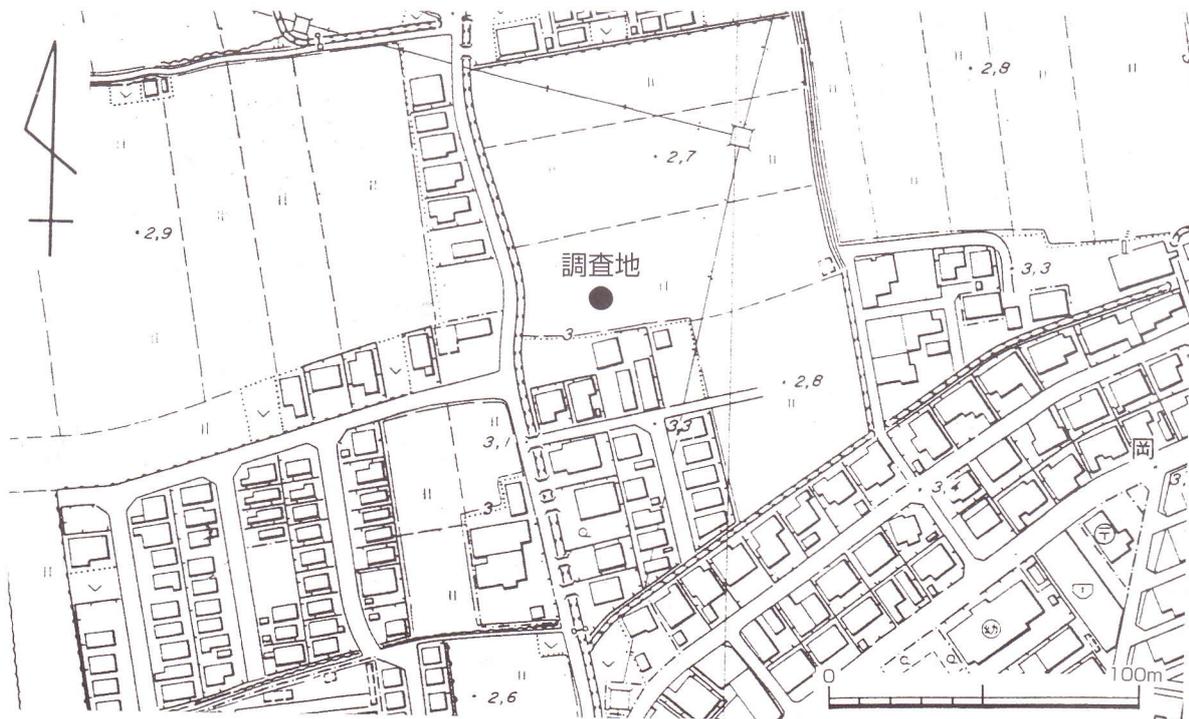
本遺跡は福飯ヶ峰の北裾の平地に立地し、東西約1 km、南北約500 mの規模をもつ。第1次・第3次調査では弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺構・遺物が確認され、遺跡範囲の西端部での第2次調査では、自然地形の落ち込みが検出されている。

調査の内容

宅地造成に伴う防火水槽部分を対象として調査を実施した。基本土層は、第1層が砂利による整地層（厚さ50～70 cm）、第2層が暗灰褐色砂質土（厚さ約20 cm）、第3層が灰黄色シルト（厚さ約20 cm）、第4層が淡灰黄色砂質土（厚さ約10 cm）、第5層が淡灰色砂層であった。遺構は、第3層上面より形成された土坑1基（SK-1）とこの土坑の下面からさらに落ち込む土坑状遺構（SK-2）がある。土坑1は全体を確認したわけではないが、南北長約3.5 m、東西長4 m以上、深さ約30 cmであった。土坑底面には一部炭層が形成されていたことから竪穴住居の可能性を考慮しながら調査を進めたが、床面が平坦面とならないことや支柱穴・壁溝が検出されないことから土坑として扱った。土坑埋土からの出土遺物には古墳時代初頭頃の土師器がみられた。

まとめ

性格は不明確ではあるが、古墳時代初頭頃の土坑が確認され、本遺跡の中心時期がその頃であることが再確認できた。第1次・第3次調査地点の成果などから、本調査地点より北方では遺構・遺物の密度が徐々に希薄になっていく可能性がある。（前田敬彦）



調査位置図

10. ^{いさお}有功遺跡 第2次調査

調査地 和歌山市六十谷 1036-1・1036-2 番地

調査面積 40 m²

位置と環境

和歌山平野を東西に流れる紀ノ川の北岸部は、その流れに沿って帯状に遺跡が連なって存在している。当該地についても有功遺跡・法然寺遺跡・六十谷遺跡等が近接しており、未周知の埋蔵文化財の有無を確認するための調査を行った。

調査内容

地表下 40 cm のところで柱穴と思われるピット列を検出した。ピットは地山直上から掘り込まれ、直径約 40 cm、深さ約 40 cm の同規模のものが約 1.8 m 間隔で南北方向に 3 個以上直列している。調査区の東側を拡張してピットを探したが検出できなかったため、構造物であれば西側に痕跡が残っている可能性が高い。

遺物はピット 2 の底部近くから土師器質の土器片が 1 点出土したが、種類・年代等を判断できるものではなかった。

まとめ

当該地は有功遺跡の東部に隣接する無印地であったが、年代を判断する資料を欠くものの遺構が検出されたことで、有功遺跡の範囲が東に延びていることが確認できた。この結果、周辺地における埋蔵文化財への注意が一層重要になったことになる。 (益田雅司)



調査位置図

11. 太田・黒田遺跡 第44次調査

調査地 和歌山市太田 294-1 番地

調査面積 43 m²

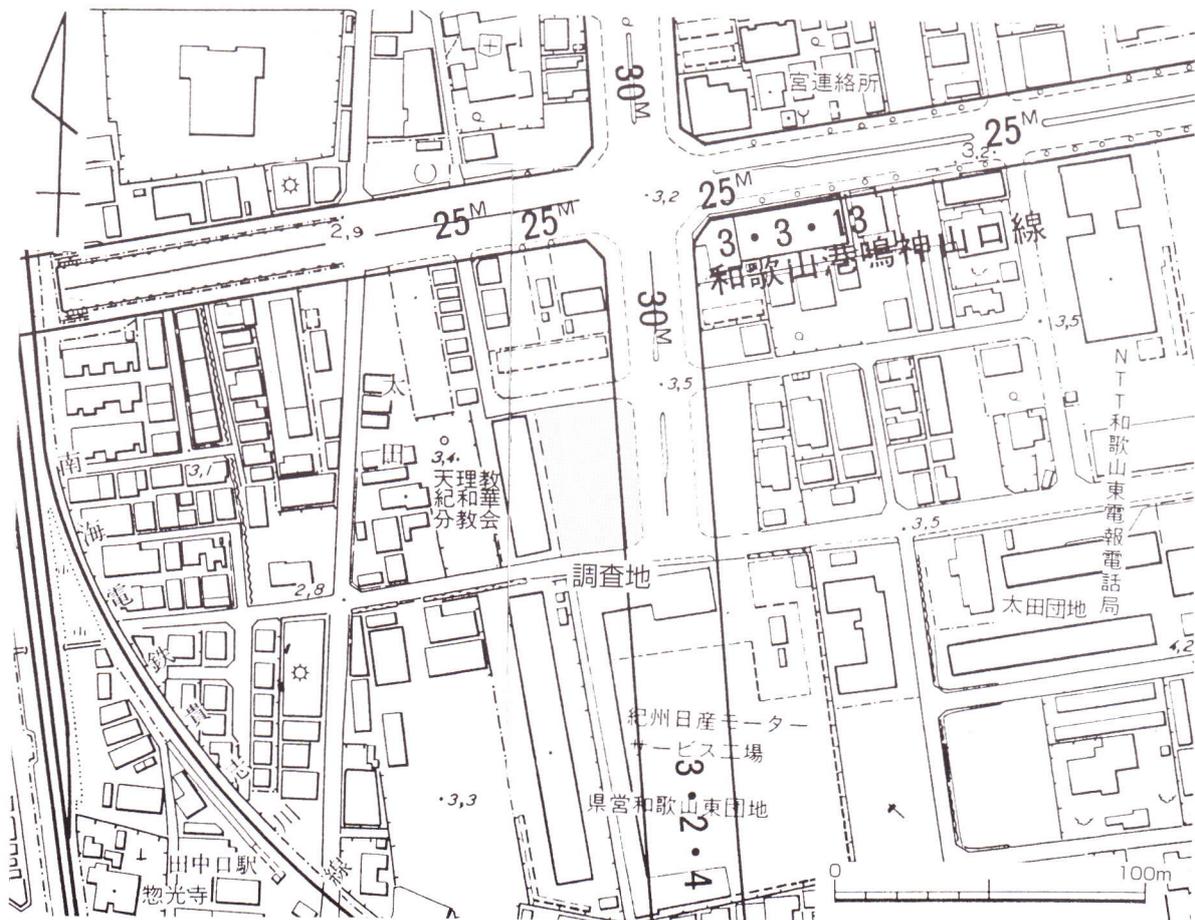
位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流の南岸に位置する弥生時代の大規模遺跡として著名である。この太田・黒田遺跡の南半には、中世期の館跡に由来する太田城跡が重複するようにして位置している。調査対象地は、太田城跡推定範囲の南西端部に位置する。調査により弥生時代中期の遺構が確認され、太田城跡と関係する中世期の遺構がまったく確認されなかったことにより、太田・黒田遺跡の調査歴として記述する。

調査内容

建物建設予定地内に南北方向にトレンチ（幅1.2～1.5 m、長さ22.4 m）を設定して調査を実施したところ、弥生時代の溝が東西方向に延びているのが確認されたため、西方に長さ7.2 mの拡張トレンチを設けて、追加調査を実施した。

基本堆積土層は4層である。1層は厚さ約80 cmの近代盛土で、上層の厚さ30～40 cmの砂層（1 a層）と下層の瓦混じりの灰褐色砂質土（1 b層）や鋳物工場からの廃土（1 b'層）で構成



調査位置図

される。2層は厚さ約20 cmの旧耕作土で、3層は厚さ5 cm程度の暗灰色シルト層である。この3層が希薄な遺物包含層であり、わずかに須恵器・土師器を包含する。4層は、この地点でのベース層であり、無遺物層であった。この4層は厚さ1.3 m以上のシルト層で、上層がより灰茶色、灰黄色系の色調を示すのに対して、下層が茶褐色系を示す。色調により4 a～4 e層までの5層に分層は可能であったが、文化的にはあまり意味をもたないものと判断された。

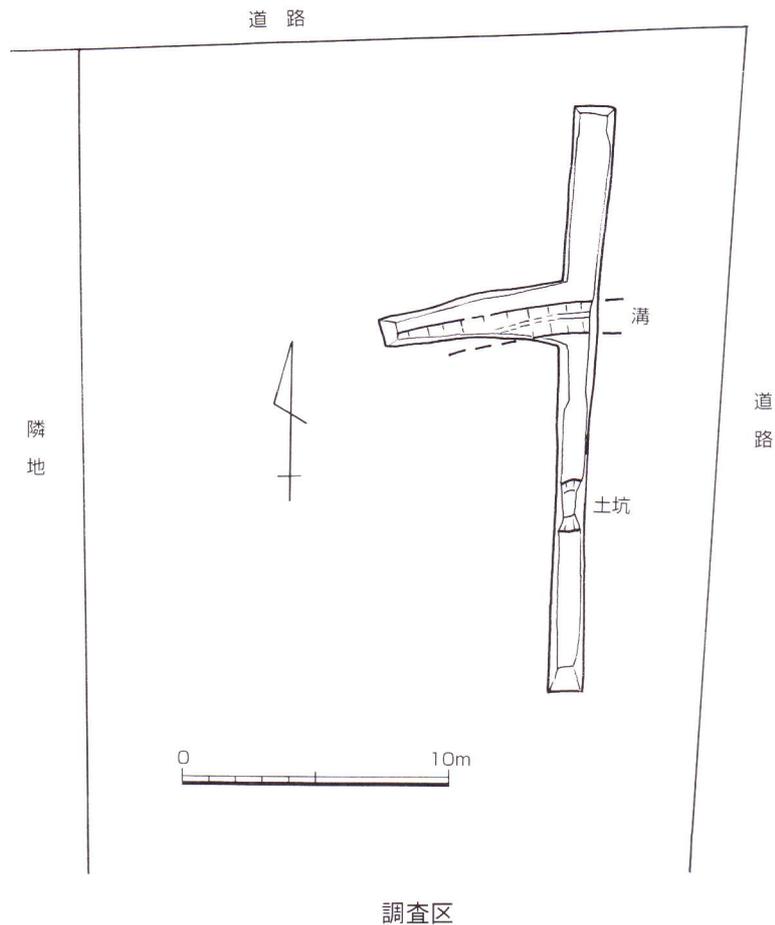
遺構は、2層下面に形成された土坑と3層下面に形成された溝1条がある。土坑内からは摩滅した須恵器・土師器が微量出土したが、検出面よりみて中世以降の時期に形成された可能性が高い。幅1～1.2 m、深さ60 cmで東西方向に7 m以上延びる溝からは、弥生時代の台形土器片が出土しており、弥生中期の遺構と判断された。

その他のものとして4層内で墳砂が確認されたが、形成時期の限定はできなかった。

まとめ

調査地は前記のように遺跡推定範囲の南端に相当しており、遺物の出土は極めて少量であった。明確な遺構としては、弥生時代中期の溝が1条検出されたのみであった。この溝の性格については、限られた調査区からは明言できないが、埋土からの遺物量も少ないことなどから、集落に近接するものではなく、中枢部から離れた位置に掘られた水路としての機能を想定しておきたい。

(前田敬彦)



[平成 11 年度 (1999 年度)]

12. ^{たかい}高井遺跡 第 2 次調査

調査地 和歌山市直川高井 1234-1 番地

調査面積 600 m²

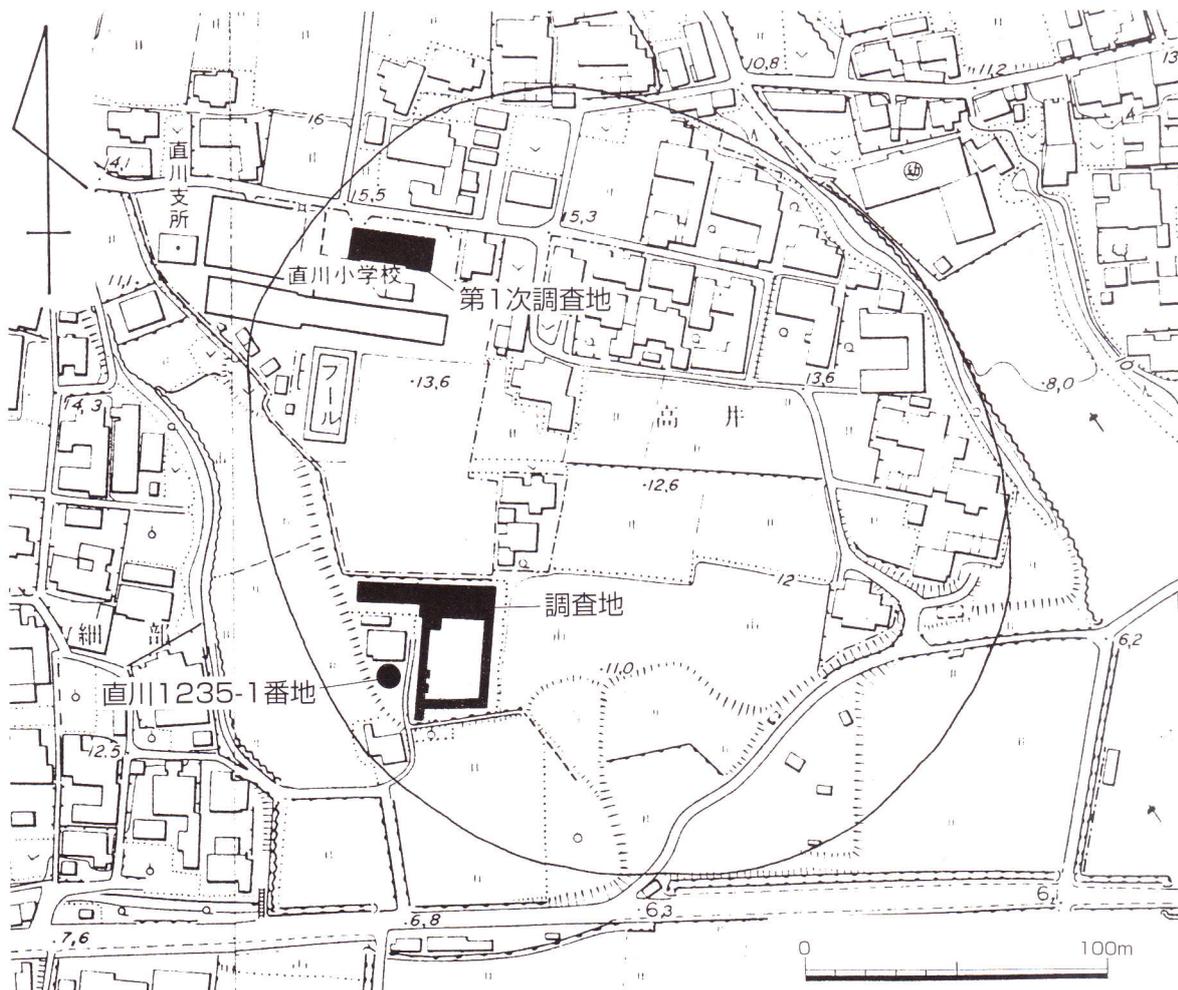
位置と環境

高井遺跡は、和泉山脈の南麓、標高約 12 m の河岸段丘上に立地する遺跡である。遺跡は東西南北ともに約 250 m を範囲とし、遺跡の南側には推定南海道が復原されている。今回の調査地は遺跡の南西部に位置するもので、直川小学校南側隣接地に小学校プール建設が計画され、その事前調査として行ったものである。

調査地北側約 100 m の地点にあたる第 1 次調査では、古墳時代の土坑 1 基、平安～鎌倉時代頃と考えられる掘立柱建物を構成する柱穴群を検出し、古墳時代以降の遺物が出土した。また、直川1235-1番地の民家敷地において、庭池の掘削時に土地所有者により古墳時代後期の須恵器や土師器などが掘り出されている。

調査内容

調査対象範囲内において北東側の南北10m、東西24mの調査区を第1区、西側に隣接する南北6m、東西21mを第2区、第1区東端から南に幅2.5m、長さ30mのトレンチ調査区を第3区、第1区西端から第3区と同様に南に幅2.5m、長さ33mのトレンチ調査区を第4区を設定した。そして、第3区と第4区の南



調査位置図

端を結ぶ幅 3 m、長さ 18 m のトレンチ調査区を第 5 区とし、合計面積約 600 m² の調査を行った。

調査地の基本的な土層堆積状況は、現地表である水田耕土（第 1 層）下に、床土（第 2 層）、その下には旧耕土（第 3 層）とその床土（第 4 層）が堆積する。さらに下層には室町時代までの遺物包含層（第 5 層）及び鎌倉時代までの遺物包含層（第 6 層）がそれぞれ堆積し、第 7 層以下は無遺物層である。

遺構は、第 7 層上面において全調査区で検出したが、中でも第 2 区を除く調査地中央部から東側にかけては、掘立柱建物に伴うとみられる柱穴などを多数検出し、調査地の中でも特に遺構の密集する場所とみられる。遺構の時期は大きく古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代の 4 時期に大別できるが、奈良時代の遺構は比較的少なく、明確なものでは調査区南東部において検出した土坑 1 基（土坑 7）がある。

古墳時代では、土器棺 1 基、竪穴住居 2 棟、貯蔵穴と思われる遺構 1 基などを検出した。土器棺は第 1 区のほぼ中央で検出したもので、生駒西麓産の土師器甕を横位で埋設する。時期的には庄内式併行期と考えられる。竪穴住居は調査区中央部で 2 棟検出した（竪穴住居 1・2）。調査区が狭少な範囲であり、全容は確認できなかったが、これらはともに方形の平面形を呈し、一辺約 5.5 m の規模をもつものと考えられる。時期的には竪穴住居 1 が前期後半、竪穴住居 2 が後出する中期後半のものである。

平安時代の遺構は、調査区北側に集中して確認でき、掘立柱建物に伴うとみられる多数の柱穴などを検出した。これらの柱穴群から少なくとも 8 棟以上の掘立柱建物が復元でき、その方向性など



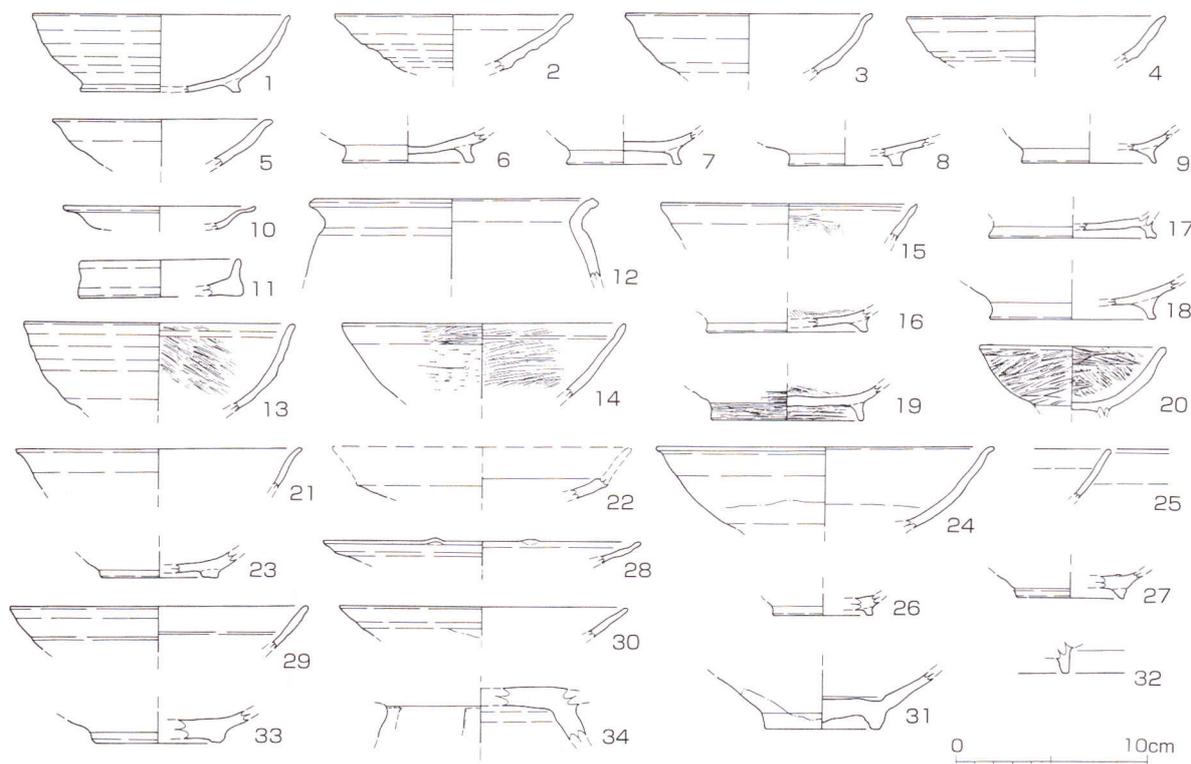
遺構全体平面図

から2時期以上のものが存在するものとみられる。この内、建物の全体が確認できた掘立柱建物1は、梁行2間(3.8m)、桁行2間(4m)の規模を有するものである。

次に鎌倉時代の遺構は、調査区南側に集中して確認したもので、掘立柱建物1棟分以上、土葬墓と考えられる土坑1基(土坑10)、集石遺構2基(集石遺構1・2)、集落の南限を画すると考えられる溝2条(溝6・7)などを検出した。土坑10は、長さ138cm、幅26~34cmを測るもので、棺蓋上に副葬されていたと考えられる北宋銭が15枚以上出土した。集石遺構1・2は、一辺約2.5mの規模を有し、隅丸方形の平面形を呈するものと考えられる。遺構内には砂岩の河原石、片岩が据えられており、礫の上面のみが被熱し赤片していたが、床面等には火を受けた痕跡は認められなかった。これら2基の集石遺構は同様の性格のものであり、その形状から火葬遺構の可能性が考えられる。

遺物は、縄文時代から江戸時代にかけてのものが出土した。土器類では弥生時代中期の壺、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉・灰釉陶器、輸入陶磁器などがある。その他の遺物では、縄文時代の石鏃、古墳時代の叩石・台石・砥石などの石器、瓦、竈・土錘などの土製品、北宋銭などが出土した。

これら出土遺物の内、平安時代の土器については既刊の概要報告書において一部誤認があったため、以下訂正報告しておきたい。土師器・黒色土器は、回転台成形により製作された在地の土師器碗(1~9)、黒色土器A類碗(13~18)が多いが、搬入土器として「て」の字状口縁を呈する土師器皿(10)、楠葉産の黒色土器B類碗(19)がある。緑釉陶器は5点出土しており、畿内産の碗(21)、東海猿投窯の稜碗(22)、近江産の碗(23)がある。なお、23は既刊の概要報告書において防長産と記述しているが、再検討の結果近江産の誤認である可能性が高い。^(註1) 灰釉陶器(24~28)は8点出土しており、猿投・美濃窯産の碗・輪花碗・皿がある。25は概要報告書では蓋としているが、口縁端部を面取りした碗の口縁部片と考えられる。中国製白磁(29~33)は12点出土しており、碗と皿がある。34は須恵器圈脚円面硯の硯面部で、磨墨面は径9cm前後を測る小形のものである。



遺物実測図

まとめ

高井遺跡は縄文時代の遺物散布地として認知されているが、平成2年に本財団が遺跡の北西部で行った第1次調査で、古墳時代から鎌倉時代にわたる遺構を検出し、当該期にも遺構・遺物が存在することを確認した。遺跡の南西部にあたる今回の第2次調査では、大きく3時期の遺構を確認し、高井遺跡が複合遺跡であることを明確化することができた。

古墳時代の竪穴住居は2棟のみであったが、第5区西端で古墳時代中期以降の貯蔵穴とみられる遺構を検出した。これは削平された竪穴住居に伴う可能性があり、さらに西隣接地である直川1235-1番地から6世紀前半頃の土器が採集され、聞き取り調査などから同地点には竪穴住居が存在する可能性が非常に高いものと考えられる。このことから、時期的には古墳時代前期から後期まで継続する集落跡であると考えられる。

次に平安時代では、調査区北側で密集して検出した柱穴群から少なくとも掘立柱建物8棟以上が復原でき、それらは数時期の立て替えが想定できる。また、第1次調査においても柱穴群の存在から掘立柱建物の存在が推定でき、当遺跡の西部には南北150m程度の範囲に掘立柱建物群が展開したことが想定できる。また、遺物についても在産の土器の他に緑釉・灰釉陶器、黒色土器、中国製白磁など他地域からの搬入品が一定量出土した点が注目できる。

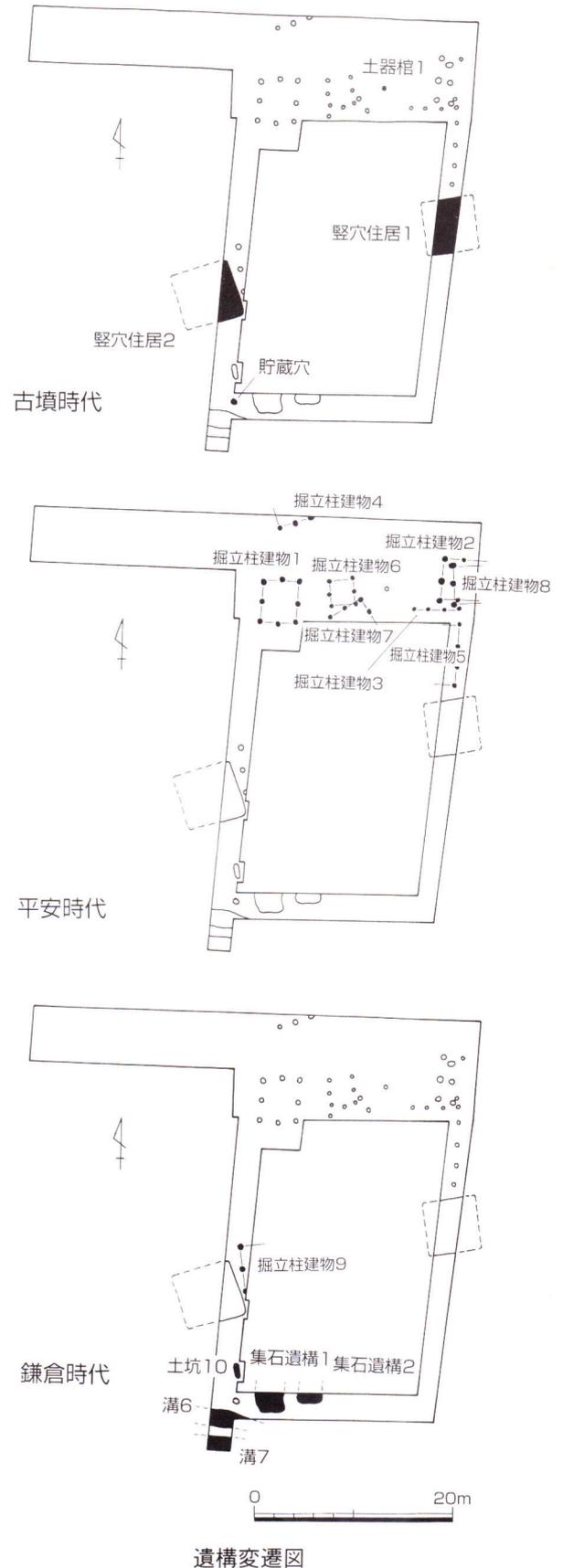
鎌倉時代の遺構は調査区南側に集中し、柱穴群から掘立柱建物を1棟復原することができた。また、北宋銭が15枚以上出土した土葬墓や火葬遺構と考えられる集石遺構の存在から、鎌倉時代には集落縁辺部が墓域化したものと考えられる。

今回の調査では、以上のような遺構の変遷を明らかにすることができたが、特に平安時代の掘立柱建物群、硯や緑釉・灰釉陶器などの特殊な遺物が出土した点は、高井遺跡が古代の官道である南海道に沿った遺跡であり、東1.5kmに紀伊国府推定地が存在するという遺跡の環境を反映していることと言え、当遺跡を官衙及びその関連施設と関わる遺跡として位置づけることができよう。(川口修実)

註1) 奈良国立博物館 高橋照彦氏のご教示による。

【参考文献】

『高井遺跡第2次調査概報』(財)和歌山市文化体育振興事業団2000年



13. 府中遺跡発掘調査

調査地 和歌山市府中 1116 番地

調査面積 260 m²

位置と環境

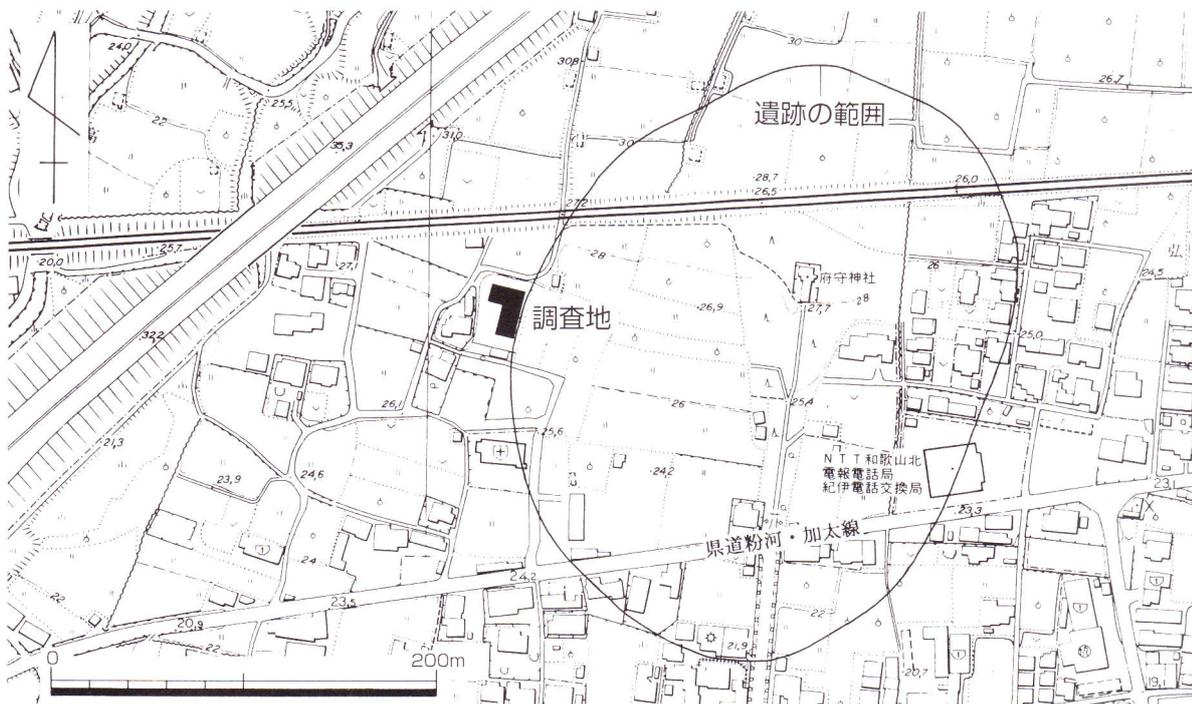
府中遺跡は、和歌山市の北東部、紀ノ川下流域の北岸段丘上に位置し、遺跡範囲内にある府守神社（現聖天宮）を中心とした紀伊国府跡推定地とされている遺跡である。また当遺跡の南端を東西走る県道粉河・加太線は推定南海道とほぼ一致すると考えられているものである。このような官道の存在と「府中」という地名はこの地に国府が存在した可能性を物語るものとして注目される。

調査内容

調査区の土層については、まず現代の畑作耕土である第1層が堆積し、その下層には旧耕土の第2層がみられた。第2層は、灰色で粗砂をわずかに含む粘質の土層である。第1・2層には奈良時代から現代までの遺物が含まれている。第3層は、江戸時代の遺物包含層で、暗灰黄色の粗砂である。この第3層は、調査区の全面においてみられるものではなく、調査区の南東部においてのみ認められた。次に第4層については、第3層と同じく江戸時代の遺物包含層で、暗灰黄色の粗砂を含むシルト質の土層である。この第4層は、調査区の北西から南西部にかけてみられるもので南東部では認められなかった。第4層より下層については、無遺物層である。遺構は、第4層掘削後の第5層上面において遺構検出を行った結果、調査区の



府中遺跡採集軒丸瓦
(参考文献から引用)



調査位置図

北側で集石遺構 1 を検出した。集石遺構 1 は、長さ 14.3 m 以上、幅 2.0 ~ 3.4 m を測るもので、上部が削平を受けているためか第 1 区半ばで消滅している。また、その方向性は真北からみて $N-15^{\circ}-E$ であり現行の畦畔とほぼ同じ方向性をもつ。この遺構は、深さ約 20 cm、幅約 3.0 m の溝を掘削した後、その中に 5 ~ 15 cm の砂岩礫を無造作に入れ込んだもので、使用されている石材はすべて角のある砂岩である。

遺物には、複弁蓮華文軒丸瓦や土師器、須恵器、瓦器、瀬戸美濃・唐津などの国産陶器、中国製磁器、肥前系磁器、石鏃、火打石などがあり、すべて第 1 ~ 4 層の遺物包含層及び、調査地周辺において出土したものである。これらの時期は奈良時代から江戸時代のものである。

まとめ

紀伊国府の所在地は、平安時代中期の文献資料や地名などから和歌山市府中であることが推定されている。調査の結果、現地表面から深さ 30 ~ 40 cm の、第 5 層上面において石敷状の集石遺構を 1 基検出した。集石遺構は遺物が出土しなかったため、時期は不明ながら、現行畦畔とほぼ同じ $N-15^{\circ}-E$ の方向性を持ち、幅 2.0 ~ 3.4 m の範囲で直線的に延長 14 m 以上の規模を測るものである。遺構の性格として、土塀などの構造物の基礎（地業）である可能性が考えられる。

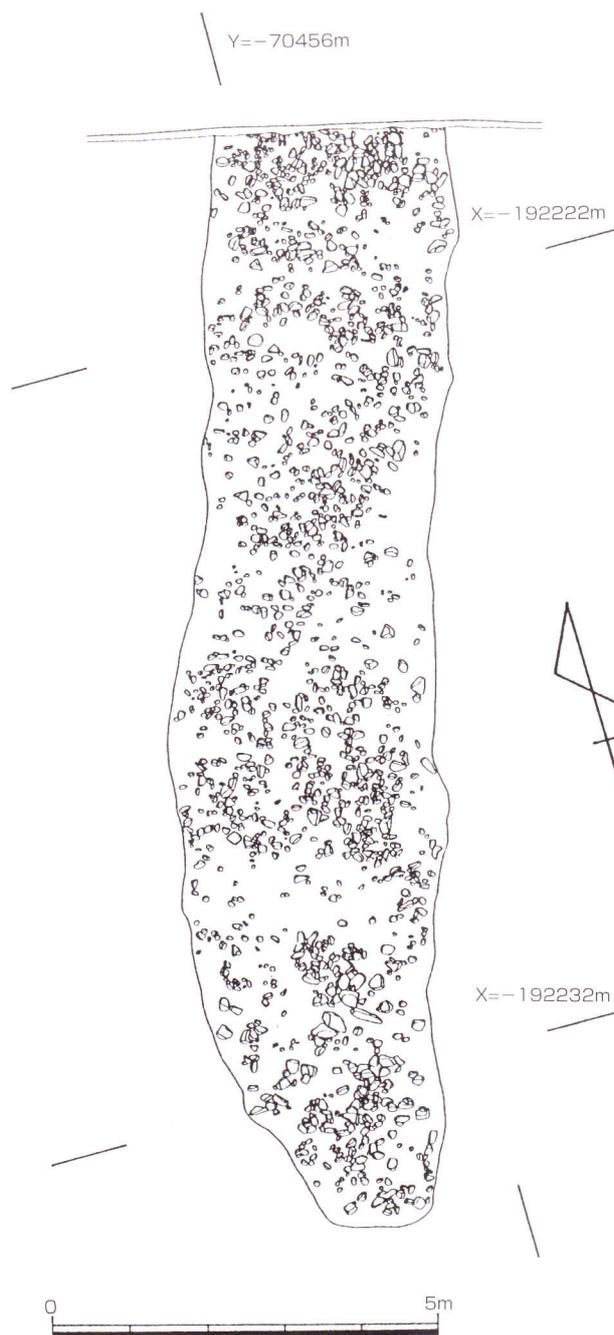
(藤藪勝則)

【参考文献】

和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所『紀伊風土記の丘年報』第 5 号 1978 年



SX-1 土層堆積状況 (南から)



SX-1 遺構平面図

14. ^{あきづき} 秋月遺跡 第8次調査

調査地 和歌山市秋月 365 - 3 番地

調査面積 900 m²

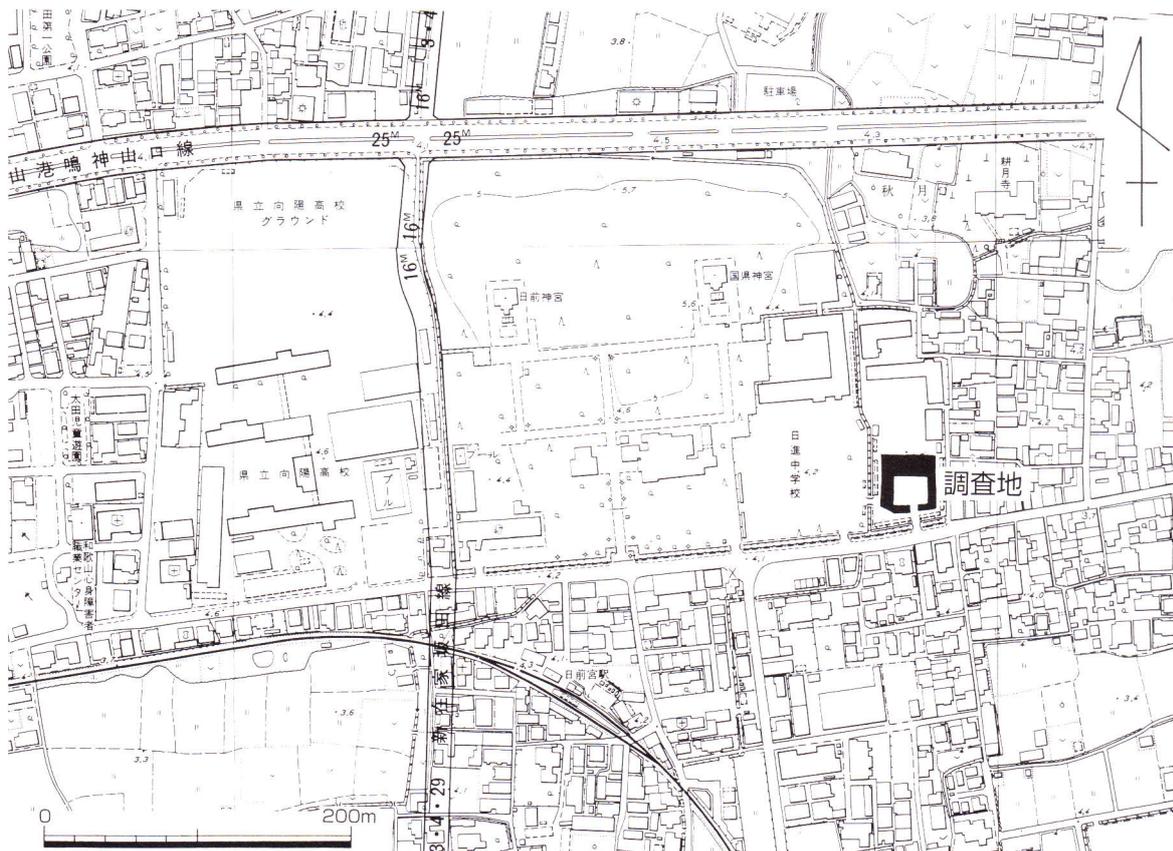
位置と環境

秋月遺跡は秋月の地に鎮座する日前・国懸神宮の周辺に広がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。この神宮の西側に隣接する県立向陽高校の敷地内から県内では最古級とされる古墳時代前期の前方後円墳が、また東側では竪穴住居が検出されており、古墳時代の遺跡としてもよく知られている。この周辺は、紀ノ川南岸の条里地割が良好に残る地域であり、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く出土することで注目される地域のひとつとされる。

今回の調査対象地は、遺跡の東端にあたり、神宮の東側に隣接する市立日進中学校の東運動場に位置し、平成10年1月から3月にかけて確認調査を行った第6次調査地の調査範囲と一部重複する。この第6次調査は、実質的に今回の第8次調査の試掘調査にあたるもので、弥生時代の自然流路や古墳時代前期の土器廃棄土坑のほか、奈良時代から江戸時代にかけての多くの遺構を検出し、また平安時代頃まで遡る可能性をもつ瓦を始めとした多量の遺物が出土した。

調査内容

調査区は、基本的に工事計画範囲における建物の基礎部分にあたる地点に設定したもので、特に前回の第6次調査において遺構の集中した北側の微高地を中心に調査区を設定した。



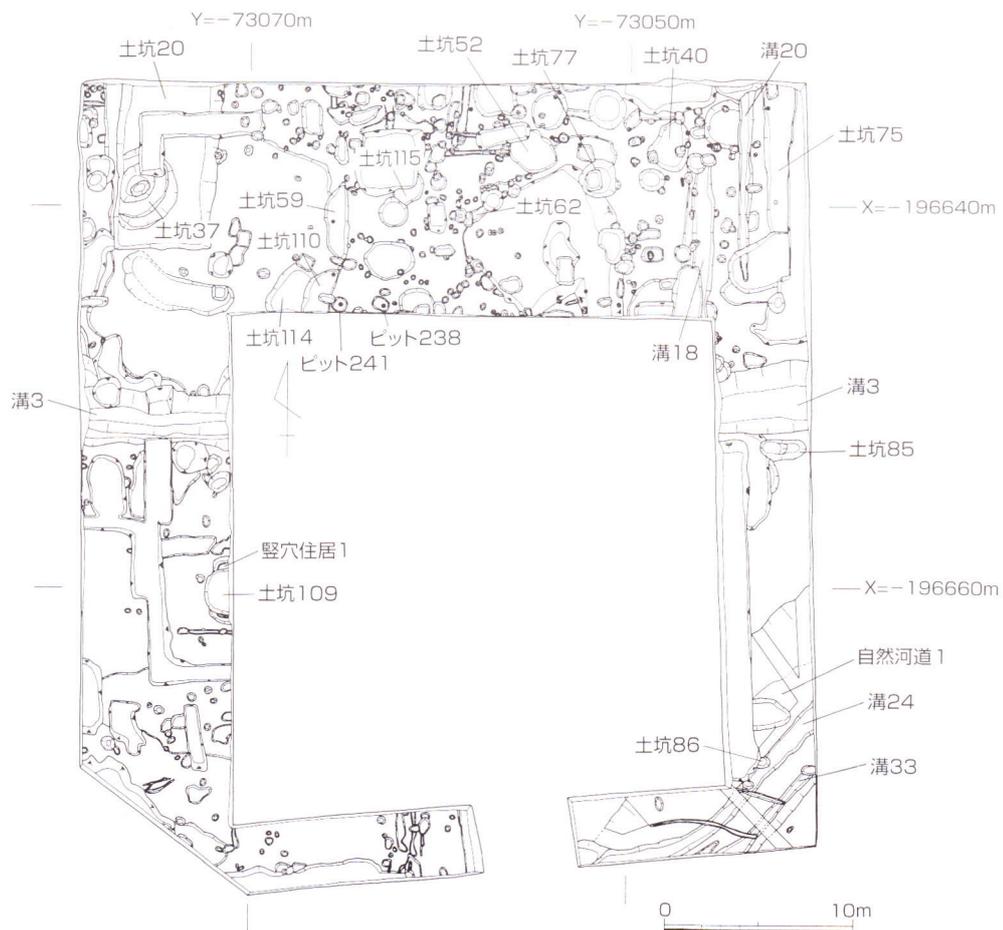
調査位置図

調査地の現況は運動場であるため、表土は全体的に厚さ10～20cmを測る整地土である。表土下は、近代以降の整地層(第1～4層)が堆積し、江戸時代の溝3を境として北側の微高地上では約20cm、南側の微低地部では50～70cmと次第に厚くなる。また南側の一部に江戸時代の遺物包含層(第5・6層)が堆積している。この整地層及び遺物包含層下が厚さ約30cmを測る黄褐色系のシルト層となり、その上面が弥生時代前期末から江戸時代にかけての遺構検出面である。

遺構は、調査区のほぼ全体において弥生時代から江戸時代にかけての様々な時期のものを多数検出した。特に、調査区のほぼ中央を東西に貫く江戸時代の溝3を境とし、その北側の微高地部(標高4.0m)に密集している。

まず弥生時代の遺構は、微高地部のほぼ中央で検出した土坑115とその南側の南壁面下に検出した土坑114、調査区南東隅で検出した自然河道1などがあり、これらは前期に比定できる。土坑115には壺とともに石鏃の未製品2点のほか、100点以上のサヌカイト剥片が出土していることから、石器製作に関わる土坑と考えられるものである。また自然河道1は、調査区の南半部において、北東から南西方向に北側肩部を検出した。この河道の南側肩部については確認できなかったが、復元幅は9.0m以上、深さは検出面から約1.8mを測り、N-40°-Eの方向性をもつ。自然河道1が埋没した後に掘削された溝24・33は、ともにN-45°-Eの方向性をもつもので、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけての溝と考えられる。

古墳時代の遺構は、微高地部では調査区西端において検出した江戸時代の土坑(土坑20)の底



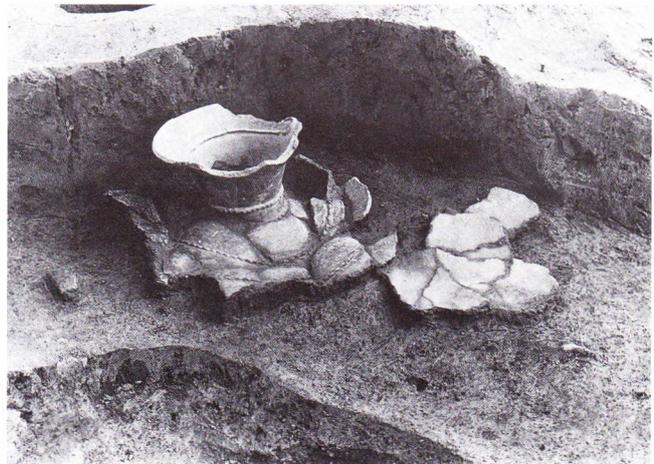
遺構全体平面図

面で検出した土坑37や調査区ほぼ中央部に位置する土坑62、土坑110などがある。また微低地部では南東隅で検出した溝33や土坑86、南西部で検出した竪穴住居1や土坑109などがある。土坑37は第6次調査時において1/2程度を検出していた前期の土坑であり、内部からは布留式併行期の壺・甕・高杯・鉢が密集する状況で出土した。この土坑は外側に直径約3.9mのホリカタをもつことが判明したことから井戸の可能性が高いもので、廃棄時に多量の土器を用いた祭祀が行われていたものと考えられる遺構である。土坑62は長径1.0m以上、短径0.5m、深さ30cmを測る土坑であり、中期に比定できる。この土坑からは、土師器、須恵器に混ざり、滑石製の管玉・白玉が各1点出土した。土坑86は、溝24が埋没した後に掘削された中期のもので、検出面から約60cmの深さを測る。この土坑も、その形状から井戸とみられ、底面から完形の甕が2点出土し、うち一点は口縁部を下に向けた状態で検出した。竪穴住居1は中期後半～後期初頭に比定できる方形のプランのものともみられ、中央部を古墳時代後期後半の土坑109によって切られている。この住居は拡張による建て替えが行われており、古段階の規模は南北2.3m、新段階では南北3.4mを測り、古段階における直径約30cmの柱穴を確認した。

奈良時代の遺構は、調査区中央部やや東寄りで検出した土坑77がある。この土坑は一辺1.9m前後を測る隅円方形のプランをもつものとして検出した。その形状は楕円状に落ち込む。検出面から深さ70cmのところまで東西0.8m、南北1.0mの方形プランの部分を検出したことから井戸と考えられる。この内部からは、須恵器の蓋杯・壺、土師器の蓋杯・皿・高杯・壺・甕などが一括出土した。

平安時代の遺構は明確なもので、ピット数基を検出した。

鎌倉時代の遺構は、建物に伴うとみられるピット列(ピット238・241)や調査区



土坑 115 弥生土器出土状況 (北西から)



土坑 37 (北東から)



竪穴住居 1 (北から)

東壁付近で検出した溝 20・落ち込み（土坑 75）、調査区西側の一角をしめる大規模な土坑 29 などがある。なかでも土坑 29 は、東西 12 m、南北 16 m 以上、深さ 50 cm を測るもので、特に中央から北東部にかけて多量の瓦器碗が出土した。

室町時代の遺構は、微高地部の中央やや西寄りで見出した土坑 59 や北東部で見出した土坑 40 などがある。これらはともに不定形の土坑であり、室町時代の備前焼の播鉢などに混ざり、それ以前の多量の瓦が出土したことから瓦廃棄土坑と考えられる。



土坑 77（東から）

江戸時代の遺構は、調査区東端部で南北にのびる溝 18 や土坑 84、中央部から東寄りで見出した不定形の土坑 52、西端部で見出した方形状の土坑 20 などがある。なかでも溝 18 は前期に比定できるもので、溝 3 に直交して流れ込むものと考えられる。また土坑 20 は、東西 5.5 m、南北 8.5 m 以上、深さ 70 cm を測る規模の大きなもので、幕末までの多量の遺物を含むものである。

まとめ

今回の調査は、平成 9 年度に確認調査を行った第 6 次調査において明確にできなかった遺構の規模や新たに検出した多数の遺構から秋月遺跡の南東縁辺部の様相がさらに明らかにできたものといえる。

まず弥生時代では、これまで検出例のなかった前期の遺構を確認し、自然河道北側の微高地部において前期集落が存在することを明確とした。また自然河道が埋没した上面において溝 24・33 や井戸とみられる土坑 86 が検出された。古墳時代の竪穴住居 1 は、当遺跡ではこれまで検出されているもののなかでは、最も東側に位置するものである。また古墳時代の井戸とみられる土坑 37・86 や奈良時代の井戸とみられる土坑 77 などから多数の土器が出土しており、井戸廃棄時における祭祀の事例として注目できる。平安時代では、少数のピットのみが遺構として検出されたが、後出する時期の遺構から平安時代に比定できるとみられる瓦が多量に出土した。このことから、平安時代の後期頃に日前・国懸神宮の東に存在したとされる「神宮寺」との関係が考えられる。また鎌倉時代から室町時代にかけては、土坑など多くの遺構を北側微高地部を中心として検出しており、集落の一部であることが明確である。江戸時代では、東西にのびる溝 3 の北側が生活域とみられ、溝 18 が溝 3 と直交することから屋敷地を区画する溝の可能性が考えられる。

以上のように、今回の調査では弥生時代から江戸時代にかけて多数の遺構、遺物を検出し、当地が特に遺構の密集する地域であることがさらに明確となった。今後遺跡の広がりをもさらに検討していかねばならないものと考えられる。

（井馬好英）

【参考文献】

『秋月遺跡第 6 次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 1998 年

『秋月遺跡第 8 次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 2000 年

しせきわ かやまじょう
15. 史跡和歌山城 第22次調査

調査地 和歌山市一番丁3番地

調査面積 500 m²

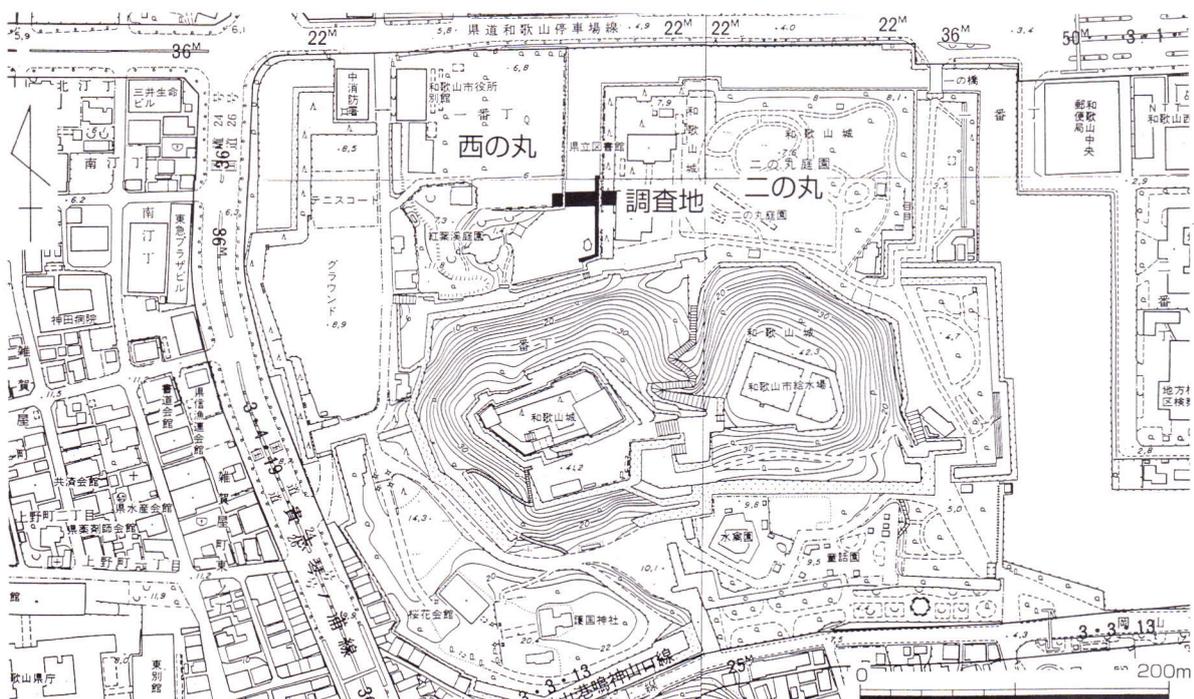
位置と環境

国指定史跡である和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡上に築かれた平山城である。今回、和歌山市が二の丸庭園西側堀の浚渫工事を実施することになり、この工事に伴って発掘調査が行われることになった。調査地はこの堀に架けられていたとされる「御橋廊下」の取り付け部分（二の丸側を第1区、西の丸側を第2区）、堀内部の推定地と周辺の石垣裾部（第3区）である。

調査内容

主要な遺構としては、第3区で検出した御橋廊下のものとみられる橋脚遺構の他、第1・2区で検出した多聞櫓、基礎石組等がある。第1区では、現地表（第1層）以下7層の堆積を確認しており、第3・5・7層上面において多門櫓に関する礎石・石列を、第3層上面において御橋廊下に関する礎石、土塀の基礎にあたる石組、塼敷遺構等を検出した。多門櫓はその構築面から3時期に区分できる。第7層上面で検出した礎石の内2基は赤変しており、周辺に焼土がみられることから、上部の建物が火災にあったものと考えられる。第2区では、第5層上面において基礎石組や近代の土坑を検出した。

第3区の橋脚遺構について、確認した礎石は20基でその内本来の構造を残すものは6基である。その出土状況から橋脚の配置は3本1組、8列となり合計24本と復原できる。橋脚遺構の規模は東西約23m、南北方向の間隔は東端で3.5m、西端で2.5mを測り、西の丸側の間隔が狭くなっているが、これは石垣の高低差によるもので、橋脚の長さの違いを基底部の幅で調整したものとみられる。



調査位置図



遺構全体平面図・断面図

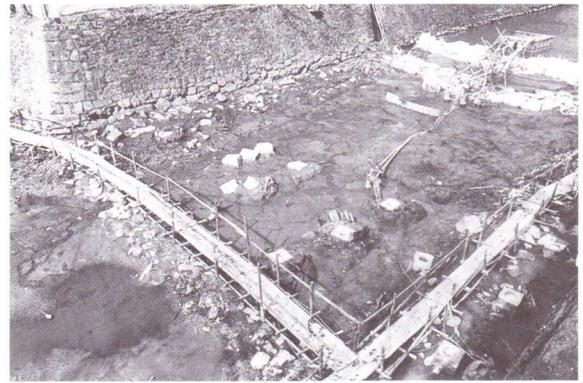
橋脚の基礎は杉の板材を直径約 1.4 m の円形に組み、その中に礎石を据えて粘土、砂礫で内外を補強する構造である。板材の枚数は 25 枚前後であり、中央部を竹のタガで固定していることが確認できた。礎石は長方体の上面に円形のはぞ穴をもつもので、石材には花崗閃緑岩を用いているが、石垣裾部に置かれた 3 基については不定形な砂岩を用い、はぞ穴は方形の穴を半載したような形状を呈している。

出土した遺物は江戸時代のものが大半であり、土師器、国産陶磁器、瓦、土製品、金属製品、木製品、縄、壁土等がある。第 1 区では瓦塼が多く出土した他、肥前・瀬戸美濃・産地不明の陶磁器などがみられる。第 2 区では肥前系陶磁器を中心とした遺物が石垣裏込内から出土した。第 3 区では石垣裾部から軒丸瓦、軒平瓦等が多量に出土し、貝類や松の種子などの自然遺物もみられた。また橋脚遺構周辺からは鉄製の釘・鏝、銅板等橋に関わる金具や銭貨、板材、込栓等の木製部材が出土している。

また、今回の調査では、周辺の石垣についても新たな知見を得ることができた。石垣 1 は南北長約 100 m を測る石垣で、石材には砂岩を用いており、打ち込みハギの布目積みで構築されている。石垣上面には幅 5 cm の溝状の凹みが 2 ヶ所、東面で刻印を 2 ヶ所確認しており、調査区中央部、南側では積み直しの痕跡が観察できる。石垣 2 は南北長 110 m、堀底からの高さ 9.5 m を測る砂岩打ち込みハギの布目積み石垣で、勾配は 76 度である。基底部の状況を把握するために掘削を行ったところ、堀底からさらに 3 段の石垣を検出し、その最下段は 30 cm ほど前面に張り出していることが明らかになった。捨石は石垣 3 段目の半ばまで堆積しており、1.3 m 以上の厚みをもつことを確認した。石垣 3 は東西長 12 m で全高 7 m を測る石垣で、石垣 2 とは約 100 度の角度で組み合っている。6～8 段目より下部は結晶片岩を用いた自然石の野面積み、上部は砂岩を用いた打ち込みハギの布目積みによって構築されているが、石垣 3 下部は隅角部の切り合いから石垣 2 構築以前に既に存在したものとみられ、使用石材や構築方法から和歌山城創建期に築かれたものと考えられる。下部の勾配は 47 度、上部の勾配は 83 度を測る。石垣 4 は堀底から 3 段目までは砂岩、それより上は結晶片岩の割石を用いて構築されていることから、大規模な積み直しが行われたものとみられた。第 2 区でサブトレンチを設定して掘削を行ったところ、裏込石や版築状の盛土を検出すると共に 17 世紀後半から 18 世紀前半の土器・陶磁器を確認することができたことから、石垣 4 は 18 世紀代には積み直しが行われたものと考えられる。

まとめ

御橋廊下は二の丸と西の丸を結んでいた廊下橋であり、その架橋位置は『和歌山御城内惣御絵



橋脚遺構全景（南東から）



橋脚基礎（南から）

図』から、外観は『二ノ丸御橋廊下桁行式拾歩一建地割』他3枚の絵図から推定できる。『和歌山御城内惣御絵図』の推定年代から考えると18世紀末には存在していたとみられるが、構築時期を示す史料は現在まで知られていない。今回、発掘調査によってこれまで絵図等で知られていた御橋廊下を実際に遺構としてその規模を確認できた。

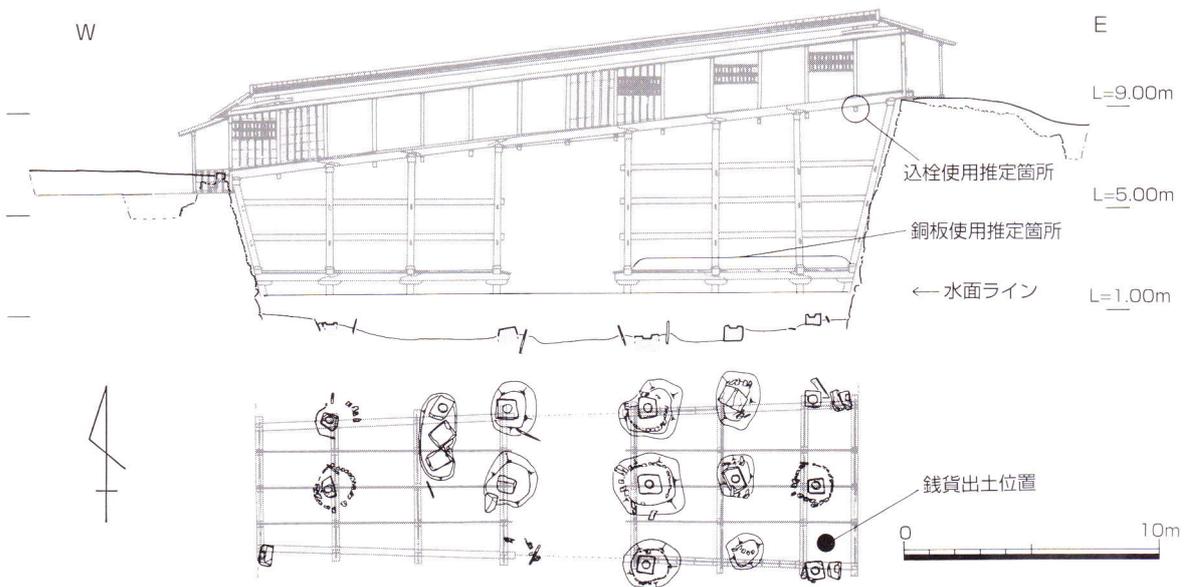
橋脚基礎は橋脚の沈下を防ぐための礎石を配し、板材で覆った内外を粘土と砂礫で補強するという工法を用いていた。同様の工法は西の丸庭園の鳶魚閣でも用いられていたことが報告されている。河川の土木工事に関する文献には類似した工法がみられるようであるが、現在のところ城郭における類例は知られていない。礎石石材に関して、石垣裾部にのみ砂岩が使用されているが、このような石材の違いは橋架け替え時に変更されたとみることできる。17世紀代の石垣は砂岩が主体であることを考えると、砂岩の礎石は当初のものである可能性がある。また花崗閃緑岩^(註1)については、石種の特徴から香川県庵治町に産する庵治石と酷似していることが指摘された。従来、吉宗期の石垣に多く用いられた花崗岩質の石材は、新宮付近から運搬された花崗斑岩と考えられていたが、少なくとも橋脚基礎の石材に関しては他藩のものである可能性が高いことが明らかになった。さらに遺物に関して、橋脚基礎付近から地鎮等城郭普請に伴う祭祀に用いられたとみられる12枚の寛永通寶が出土した。その字体から古寛永通寶とみられるが、その铸造年代から17世紀代に橋が存在した可能性が考えられる。

周辺石垣について、石垣2では基底部下面及び前面に厚い捨石層が存在することが明らかとなったが、その基底部構築状況の確認までには至らなかった。石垣3については、砂層の上に礫を置き、その上に石垣を構築している状況を確認したが、深掘調査範囲は一部であるため、石垣2と同様胴木が使用されている可能性も残る。石垣4の積み直しとその工法について確認できたとともに、その時期は出土遺物から18世紀代とみられる。(高橋方紀)

(註1) 奥田尚氏の御教示による。礎石周辺で採取した同質の石材を裸眼で観察していただいた。

【参考文献】

『史跡和歌山城第22次発掘調査概報』(勲和歌山市文化体育振興事業団 2000年)



御橋廊下合成図

しせきわ かやまじょう
16. 史跡和歌山城 第 21 次調査

調査地 和歌山市一番丁 3 番地

調査面積 20 m²

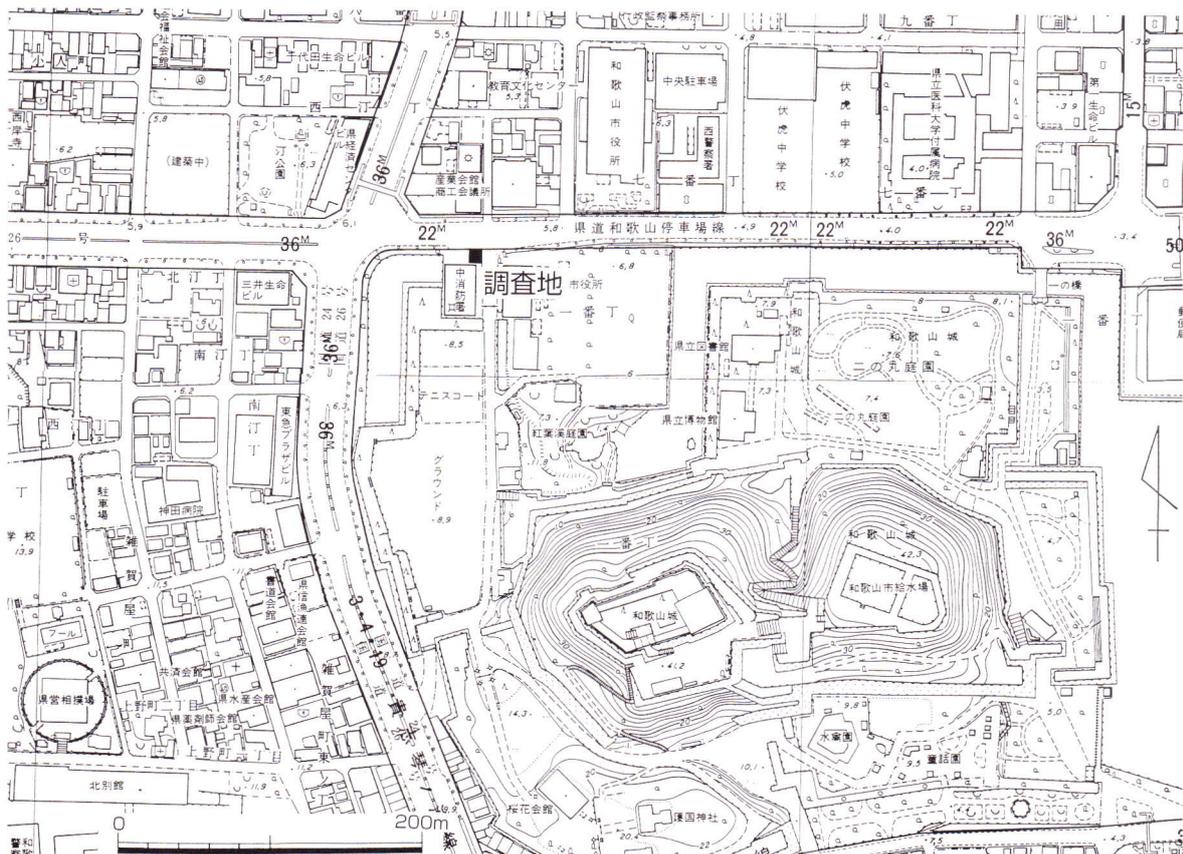
位置と環境

史跡和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する標高 48 m の独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。岡山は、東西 2 つの頂部を持つその景観から虎伏山とも称されており、中央の谷状地形を挟んだ西側には天守閣、東側には本丸御殿跡が配置され、丘陵北側平地部に二の丸、さらにその北側から東側にかけて三の丸、北西側に西の丸、丘陵西側から南側にかけて砂の丸・南の丸がそれぞれ取り囲む形で配置されている。今回の調査は西の丸北西端部に位置する中消防署北側歩道の拡張工事に伴うもので、周辺では東側隣接地で第 8 次調査、南西隣接地で第 14 次調査が行われている。特に第 8 次調査では内堀に関する石垣遺構が検出されている。

調査内容

調査は歩道拡張工事の立会調査時に内堀に関すると思われる石垣遺構を検出したことから、検出石垣の写真撮影及び平面・立面図作成等の調査を行ったものである。

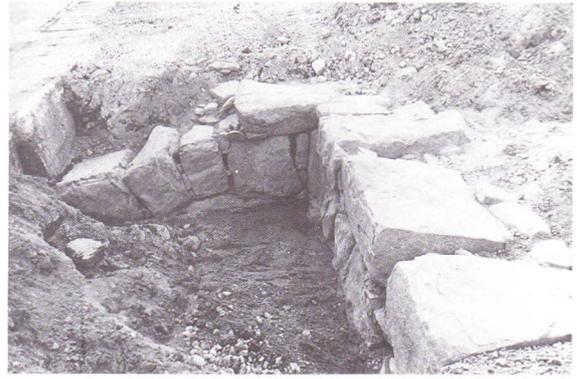
石垣は西側に位置する東面石垣と北側に位置する南面石垣を、約 85 度の角度をもって接して検出した。東面石垣は長さ約 2 m、南面石垣は長さ約 3 m を検出したが、東面石垣は上部石材を失っており、南へ向かったの沈下した状況を観察することができた。南面石垣については上部石材は失



調査位置図

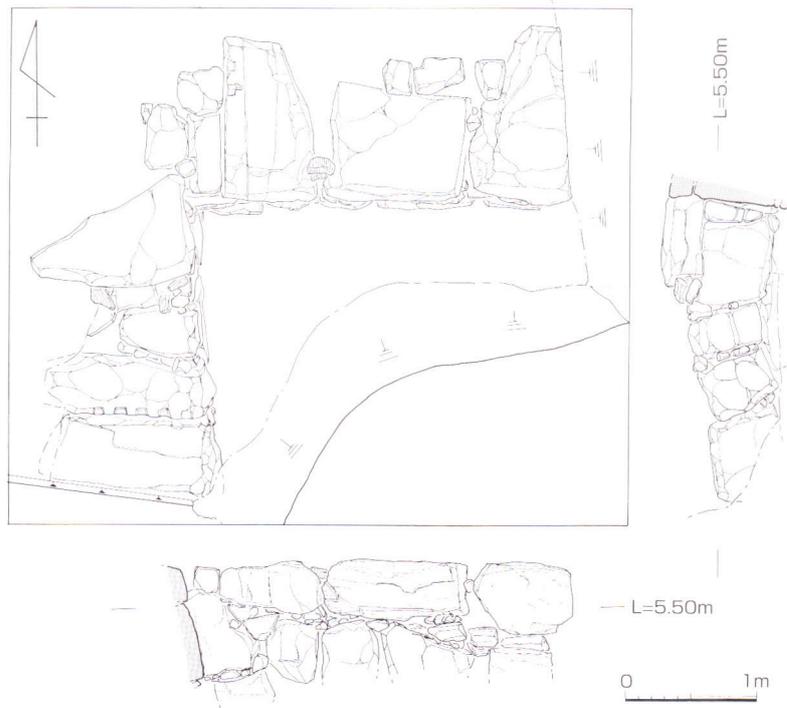


石垣（南から）



石垣（東から）

われておらず、その天端は標高 5.90 m を測るものである。天端から深さ約 1 m 分の石垣面を確認したが、基底部までは達しなかった。石垣の接する隅角部は互いに組み合っており、同時に築かれたものとみられ、東面石垣は南に、南面石垣は東にそれぞれ延びているものと考えられた。石垣は砂岩を用いた打ち込みハギの布目積みであり、裏込めに砂岩礫と結晶片岩の割石を用いたものであった。



石垣実測図

まとめ

今回の調査で内堀に關するとみられる石垣遺構を検出した。石垣の構造について、石垣石材に砂岩を用いた打ち込みハギの布目積みであり、裏込石材の状況などから江戸時代前期の築造と考えられる。調査地周辺の内堀は埋め立てられており、今回検出した石垣遺構は和歌山城の構造を知る上で具体的な資料の提供であったといえる。

【参考文献】

- 『史跡和歌山城 第 12 次発掘調査概要報告書』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1994 年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』5 (財)和歌山市文化体育振興事業団 1998 年

Ⅲ．普及啓発活動

1. 書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第21集	『山口遺跡 第6次発掘調査概報』	(平成11年3月)
第22集	『史跡和歌山城 第19次発掘調査概報』	(")
第23集	『高井遺跡 第2次発掘調査概報』	(平成12年3月)
第24集	『秋月遺跡 第8次発掘調査概報』	(")
第25集	『史跡和歌山城 第22次発掘調査概報』	(")
	『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6』—平成8(1996)・平成9(1997)年度—	(平成12年3月)

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成9年度—(平成11年3月)和歌山市教育委員会発行

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』—平成10年度—(平成12年3月)和歌山市教育委員会発行
埋蔵文化財調査報告部分の原稿を提供した。

『史跡和歌山城 石垣保存修理報告書』(平成11年3月)

和歌山市産業部 和歌山城管理事務所発行

2. 報告会等の開催

和歌山市教育委員会と共催で報告会等を実施した。

雄湊小学校児童対象の埋蔵文化財説明会

平成10年6月26日 雄湊小学校体育館 参加者6年生児童約50名

山口小学校児童対象の山口遺跡第6次調査現地説明会

平成10年8月21日 山口小学校構内調査現場 参加者4～6年生児童約90名

直川小学校児童対象の高井遺跡第2次調査現地説明会

平成11年10月20日～22日(5回)

直川小学校隣接地調査現場 参加者全校児童及び教職員約270名

史跡和歌山城第22次調査現地説明会

平成12年2月5日 和歌山城内調査現場 参加者約200名

3. 速報展等の開催

和歌山市立博物館と共催で速報展を実施した。

『第3回和歌山市埋蔵文化財速報展「発掘物語'99」』

平成11年4月24日～6月6日 和歌山市立博物館 特別展示室

速報展に伴い調査報告会を行った。

『ミュージアム・トーク「スライドで見る最新発掘情報 in wakayama city」』

平成11年5月12日(土) 和歌山市立博物館 講義室

文化財室

平成14年3月31日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 7

— 平成10年度(1998年度)・11年度(1999年度) —

編集・発行 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 中央印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 2002



西庄遺跡 滑石製子持勾玉出土狀況